

泉大津市文化財調査概要 7

七ノ坪遺跡発掘調査概要Ⅱ

1982.3

泉大津市教育委員会

泉大津市文化財調査概要 7

七ノ坪遺跡発掘調査概要Ⅱ

1982.3

泉大津市教育委員会

はじめに

七ノ坪遺跡は、泉大津市北豊中町一帯に所在する古代集落の遺跡であります。近くには、弥生時代全時代にわたる池上曾根遺跡や、古墳時代前期から中世にかけての豊中遺跡等の集落遺跡が接するように存在し、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡の七ノ坪遺跡は、両者の中間に位置付けられることが先達の調査で明らかにされ、地域史の一部を組み立てています。

近年の開発に伴い、埋蔵文化財の重要性が見直され、保存が叫ばれる昨今でありますが、行政側としましてもその対応に苦慮しているところであります。七ノ坪遺跡もその例外ではありません。幸いにも、土地所有者のご理解とご協力により、今回七ノ坪遺跡の発掘調査を実施することができました。調査といえども、発掘により遺跡が破壊されるのも事実であります。十分に調査がなしえたとは申せませんが、本書の刊行が七ノ坪遺跡を解明するうえで少しでも役立てば幸甚に存じます。

最後に調査に当たりご協力をいただきました土地所有者をはじめ多くの方々に厚く感謝いたします。

昭和57年3月

泉大津市教育委員会

教育長職務代理者

教育次長 田中儀雄

例 言

1. 本概要報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市北豊中町に所在する七ノ坪遺跡の範囲内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。
2. 本調査は、国庫補助事業及び府費補助事業（総額5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画、実施したものである。
3. 本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者 泉大津市教育委員会

調査担当者 坂口昌男（泉大津市教育委員会社会教育課）

調査員 貴志正則・楠山亨司・小倉 勝

調査補助員 岩城 一・柴原克夫・太田正康

事務局 泉大津市教育委員会社会教育課

4. 本書の作成は、坂口・貴志・楠山が分担した。なお作成にあたっては柴原・太田・藤田敦子・藤田敬代・市川終子が参加し、写真撮影は小倉によるものである。
5. 本書では、遺物実測図及び遺物写真に共通する番号を付け、本文でもこの番号を用いた。

目 次

第1章 周辺の遺跡と歴史的環境	1
第2章 調査に至る経過	5
第3章 調査結果	7
第1地点	7
遺構	7
遺物	10
第2地点	13
遺構	13
遺物	17
第3地点	32
遺構	32
遺物	34
まとめ	35
参考文献	35
遺物観察表	38

挿 図

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 調査地点	6
第3図 第1地点・第2地点平面図	7
第4図 第1・第2トレンチ断面図	8
第5図 遺構図	9
第6図 溝断面図	10
第7図 第1地点出土遺物	11
第8図 第1地点砥石	13

第9図 第2地点調査区割図	14
第10図 溝-1・2平面図	15
第11図 掘立柱建物	16
第12~20図 第2地点出土遺物	18~26
第21図 溝-1断面図	31
第22図 第3地点平面図	33
第23図 遺構図	33
第24図 断面図	34
第25図 第3地点出土遺物	34

付 表

溝-1出土土師器一覧表	32
-------------	----

図 版

1	第1地点 第3トレンチ・第5トレンチ
2	第2地点 溝-1・掘立柱建物
3	第2地点 溝-1東岸遺物出土状態・P7
4	第2地点 土器出土状態
5~11	出土遺物

第1章 周辺の遺跡と歴史的環境

七ノ坪遺跡は大阪府の南部である和泉地域の平野部に位置し、気候は温暖であり降雨量もそれほど多くなく、瀬戸内式気候に属している。温暖な気候に恵まれ、生活の場として早くから開けていて、和泉地域の文化の中心であったと思われる。降雨量が少なく大きな河川も存在しなくて水量が古来より乏しいため、人口増加に伴なって生活に、水田耕作に十分必要な水量の確保に入々は知恵をしづらったと思われる。それは和泉地域に溜池が多い事で分かる。しかしその数多かった溜池の大半もここ数年で埋め立てられて、高層ビルが立ち並びむかしの面影を少しも残していない。この宅地化は今後の農業の運命を示唆している。

天平宝字元年(757)に河内国から大鳥・和泉・日根の3郡を分割して和泉国が設置された。和泉国は分割設置以前の垂亀二年(716)に半独立的な行政体として「和泉監」が設置されていた。河内国に属してはいたが、和泉地域は独自な生活圏を構成していたと思われる。「イズミ」と呼ばれた由来は、現在の和泉市府中町の地から、清泉が発見され清水が涌き出る所として伝えられた。「和泉の清水」と呼ばれ泉井上神社境内の一角に今も残る。

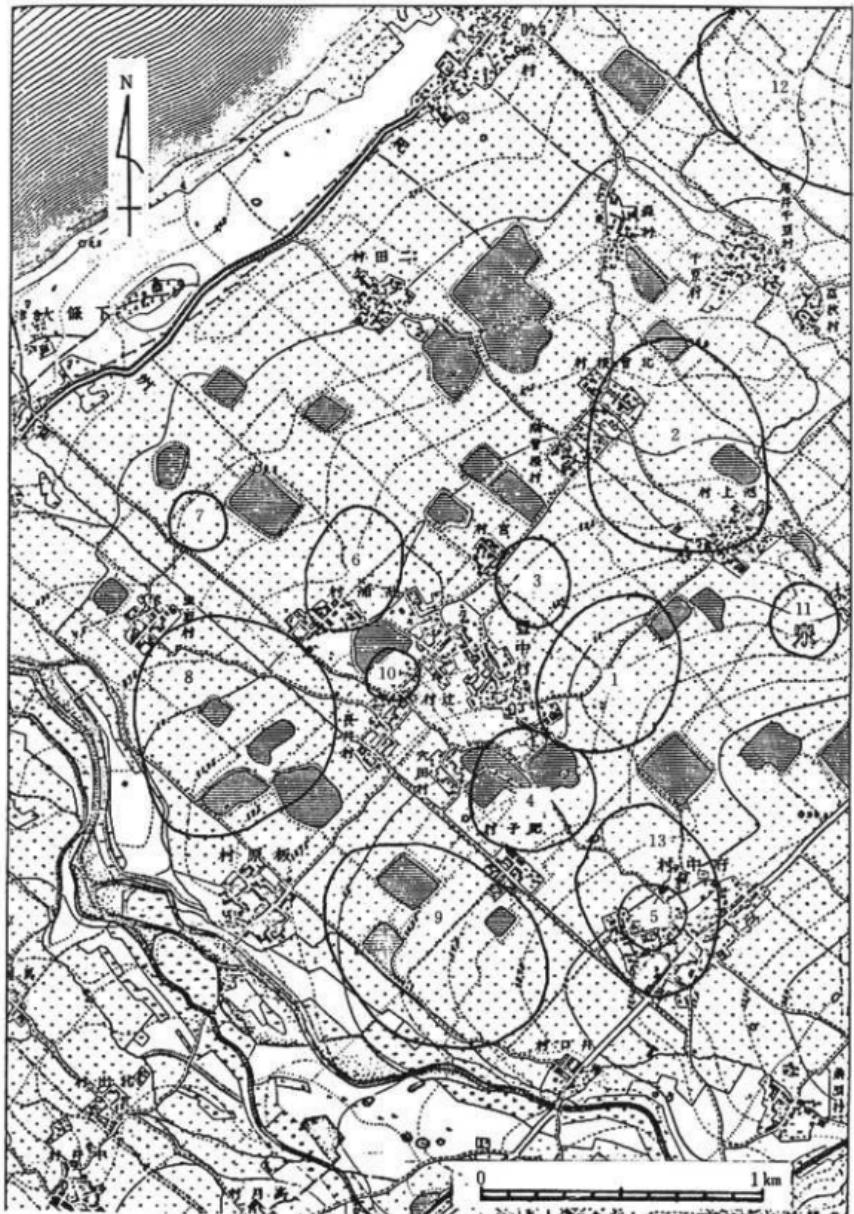
現在泉州沖の新空港建設計画に伴う交通網の整備、宅地造成による丘陵・田畠の土地開発がめまぐるしく、それに伴い埋蔵文化財の発掘調査が、各地で行なわれて遺跡の規模・年代や新しい遺物の発見があいついで報告されている。第2阪和国道(現在国道26号線)も一部を残してほぼ完成し、建設工事に伴う発掘調査において高石市大園遺跡、泉大津市から和泉市におよぶ池上・曾根遺跡、泉大津市豊中遺跡、古池遺跡の各遺跡の全容がほぼあきらかになっている。今後の発掘調査に期待されるところである。

ここで紹介する各遺跡は、泉大津市を中心として、北側は高石市・堺市、東側は和泉市、南側は忠岡町・岸和田市に所在するもので、七ノ坪遺跡Ⅱの発掘調査結果を報告するにあたり、個々の遺跡の詳細までは記せないが周辺の遺跡の概略を時代順に紹介してみる。

旧石器時代

昭和24年夏に群馬県桐生市岩宿において、ヨーロッパの旧石器によく似た遺物が発見された。旧石器時代の存在はないと考えられていたが、旧石器の発見層がもっとも古いと考えられていた繩文式土器層よりも下層の、関東ローム層からの出土であったため、日本においての旧石器時代が確証された。

日本における旧石器時代は、約10万年前から約1万2000年前までの間の洪積世に属する。旧石



1. 豊中遺跡 2. 池上曾根遺跡 3. 七ノ坪遺跡 4. 吉池遺跡 5. 和泉國府跡 6. 池浦遺跡 7. 東雲遺跡
 8. 虫取遺跡 9. 板原遺跡 10. 穴師蘿拂寺跡 11. 伯太北遺跡 12. 大園遺跡 13. 府中遺跡

第1図 周辺の遺跡

器時代は狩猟採集の時代で、人々は一定の領域を移動していたと思われる。

泉大津市では旧石器の発見は現在のところまだない。隣接する和泉市大野町において、昭和40年に大阪府立泉大津高等学校地歴部が発掘調査を行なった結果、サヌカイト製のナイフをはじめ石核・剝片約30個が検出された。^① 調査場所は大床遺跡と名付けられ、現在開墾が進み果樹園になっている付近は海拔約390mの高所で急傾斜の険しい地形である。

高石市大園遺跡から後期旧石器時代ナイフ形石器と旧石器時代終末期から縄文時代草創期・早期の有舌尖頭器が1点出土している。^② 和泉市伯太北遺跡、和氣遺跡、堺市野々井遺跡、百舌鳥本町遺跡、岸和田市西山遺跡、琴山遺跡、葛城山頂遺跡、海岸寺山遺跡等で旧石器時代に属すると思われる石器や剝片が出土している。

縄文時代

日本で最初の土器文化の時代で、約1万2000年前から2300年位前までの時期である。縄文時代の遺跡は中部山岳地帯・関東・東北地域に多く見られ、近畿地域においては非常に発見が少ない。大阪府下最南端の岬町淡輪で近年発掘調査が行なわれ、小規模の地域ではあるが淡輪縄文遺跡が発見された。現在は埋め戻され荒れ地になっている。泉大津市内においては、縄文時代の明確な遺構は現在のところ発見されていないが、縄文時代中期末に属する土器片が豊中遺跡内の砂利層より出土している。出土遺物の磨滅が激しい事や、砂利層が河川のベースと思われる事から、上流部から流されてきた可能性もあり、上流部付近に縄文時代の遺跡の存在が予想される。板原遺跡において中期末の土器片が焼土中から発見されている。

和泉市府中遺跡、伯太北遺跡、和氣遺跡、池上遺跡（池上・曾根遺跡）、そして信太山丘陵からは前期の打製石器が採集されている。他に堺市万崎遺跡、石津町東遺跡、南槇町遺跡、百舌鳥陵南遺跡、美木多第2地点遺跡、四ツ池遺跡、岸和田市箕土路遺跡、春木八幡山遺跡、葛城山頂遺跡等があげられる。

弥生時代

稲作農耕と金属器使用がはじまつたのが弥生文化の特徴で、紀元前200年から300年頃の期間である。堺市四ツ池遺跡は和泉地域においてより早くその文化を取り入れて米作りを行なったと考えられる。泉大津市曾根から和泉市池上におよぶ一帯が池上・曾根遺跡で、前期新段階の土器や中段階の土器の出土があり、後期に至る集落跡が発展しながら継続した様子が、前期から中期にかけて掘られた集落を囲む人工の溝の規模とそれが掘り直されている事からわかる。池上・曾根遺跡は和泉地域の弥生文化の中心で弥生時代の集落を代表するものである。池上・曾根遺跡よ

り西に隣接する池浦遺跡は弥生時代前期中段階に出現した集落で、低位段丘に位置しており人工的V字溝で住居区を限定していたと思える。

和泉市府中遺跡、和氣遺跡、觀音寺山遺跡、惣ノ池遺跡、堺市田出井町遺跡、三国ヶ丘遺跡、金岡遺跡、丹比新堂遺跡、岸和田市春木八幡山遺跡、加守三昧山遺跡、田治米宮内遺跡、箕土路遺跡、畠遺跡、上松中遺跡、高石市大園遺跡等があげられる。

泉大津市虫取遺跡は前期に属する。古池遺跡内要池から有鉤銅釧の出土が1点ある。

古墳時代

古墳造営の4世紀から7世紀までの時期である。高塚墳墓の造営は地域的政治集団の権力確立の時期であり、地域的政治集団の首長の権力を示すものである。やがて地域的政治集団は統合されて連合的な古代国家が形成されていく。

泉大津市において現在古墳は存在しない。

古墳を中心に前期・中期・後期に分けると、和泉市上代の黄金塚古墳（景初3年の銘のある画文帶神獸鏡を出土）、丸笠古墳、岸和田市摩湯山古墳、久米田古墳群が前期に属す。中期は和泉市貝吹山古墳、堺市百舌鳥古墳群、後期は和泉市信太山千塚、堺市陶器千塚、高石市富木車塚である。

古墳時代であるために死者の埋葬の場としての高塚墳墓を中心に記述してきたが、墓を造築した人々や埋葬されている人物の生活の場（集落）が平行して存在しているはずであるからそれも考えなければいけない。集落跡としては泉大津市豊中遺跡、古池遺跡、七ノ坪遺跡、東雲遺跡があり、遺物散布地として板原遺跡、虫取遺跡があげられる。七ノ坪遺跡においては集落跡と共に弥生時代の墳墓形態の1つである方形周溝墓や土壙墓がこの時期でも造られている。^③

飛鳥・白鳳・奈良・平安時代

この時代は仏教伝来と共に寺院造営のめまぐるしい時期で、古代豪族はこぞって氏寺の建立に勢力を注ぎ、朝廷でも宮都の造営に力を入れ飛鳥地域に宮を築いていった。和泉地域においても奈良時代に入って和泉国府が置かれ、泉大津の浜は国府津（小津）として栄えた。国府と国府津を結ぶと思われる路ぞいに掘立柱建築跡10数棟を含む集落跡が発見されている。これが東雲遺跡である。豊中遺跡においては遺構の確認はないが土器片の出土がある。白鳳時代創建の泉穴師神社、宝龜年中に創建されたと伝う穴師薬師寺跡付近や豊中遺跡等から平安時代末以降の瓦の発見がある。豊中遺跡内に「大福寺」という小字名が残っており、記録的には何も残されていないが豊中遺跡内出土の平安時代末以降の瓦と結びつく可能性もある。まだ「大福寺」の小字名の地区

においての発掘調査が行なわれていないので確認はできていないが今後の調査に期待するところである。

和泉市において奈良時代前期の創建と思われる安楽寺があり、承和6年（839）に国分寺になる。松尾寺からも奈良時代の瓦の出土があり、坂本寺、池田寺もこの時代に属するものである。

鎌倉・室町時代

泉大津市においては明確な建築物跡の確認はされていないが、豊中遺跡において種々の形態の井戸が確認されている。遺物散布地としては古池遺跡、穴田遺跡、板原遺跡、虫取遺跡、穴師神社遺跡等である。中世の明確な遺構も今後の調査で明らかになると思われる。和泉市和氣遺跡は大量の中世遺物を出土し、遺構としても和氣地区から今福・寺門地区に至る大規模な中世の住居跡遺跡である。^⑨

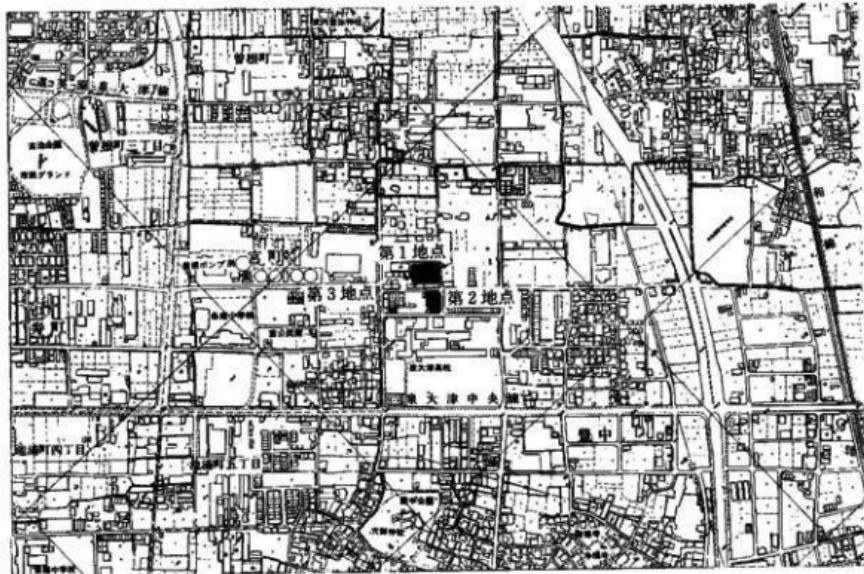
（楠山）

第2章 調査に至る経過

七ノ坪遺跡は、大阪府泉大津市北豊中町一帯に所在する、弥生時代後期から古墳時代・中世にかけての遺跡である。昭和32年冬、府立泉大津高等学校北門前の水田、通称「七ノ坪」に於いて、地下工事が行われた際、同校地歴部部員によって土師器が採集された。^⑩これが遺跡発見となり、この字名が七ノ坪であるところから、「七ノ坪遺跡」と名付けられた。その後も土木工事等が行われた際、土師器・須恵器・瓦器等の破片が出土しているが、本格的な発掘調査を実施されるところまでには至らず、遺跡の内容はほとんど不明であった。しかし昭和43年以来、府立泉大津高等学校敷地内における校舎の増改築工事計画により、府教育委員会の4回にわたる発掘調査や、同校地歴部による試掘調査、又同校周辺における府教委や泉大津市教委による調査の結果、弥生時代後期の溝、古墳時代初期の溝の他に、4世紀前半の土塹、4世紀後半の住居跡・方形周溝墓、5世紀前半の住居跡・木棺直葬墓・墓塚、中世の土塙・溝等が発見され、複合遺跡であることが確認された。又同校内南部及び西部において、府教委の精細な調査により、古代の水田跡等が発見され、注目を浴びている。^⑪

さて、前記方形周溝墓が発見された場所の付近において、宅地造成工事や、保育所建設工事の計画がなされ、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届」が提出され、届出者と協議の結果、今回報告する三カ所（第2図）で調査を実施することとなった。

（坂口）



第2図 調査地点

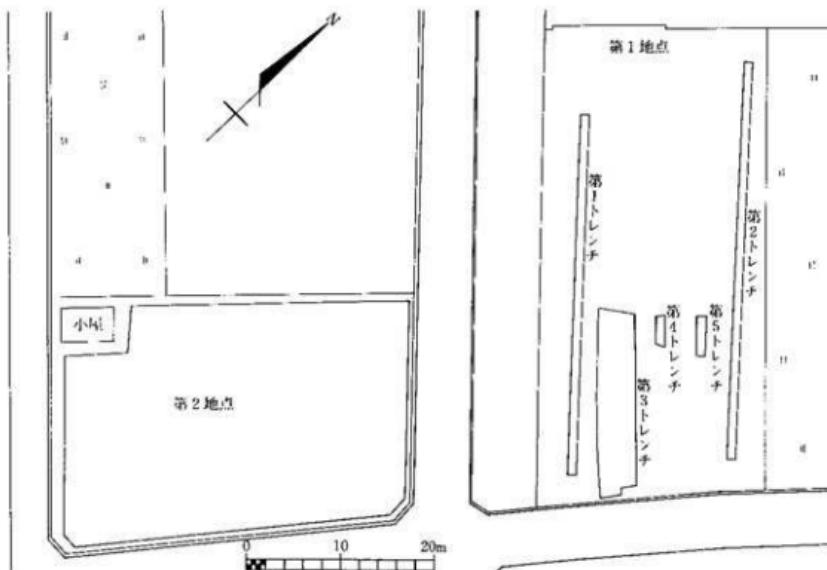
第3章 調査結果

第1地点 泉大津市北豊中町606-1,609 (第3図)

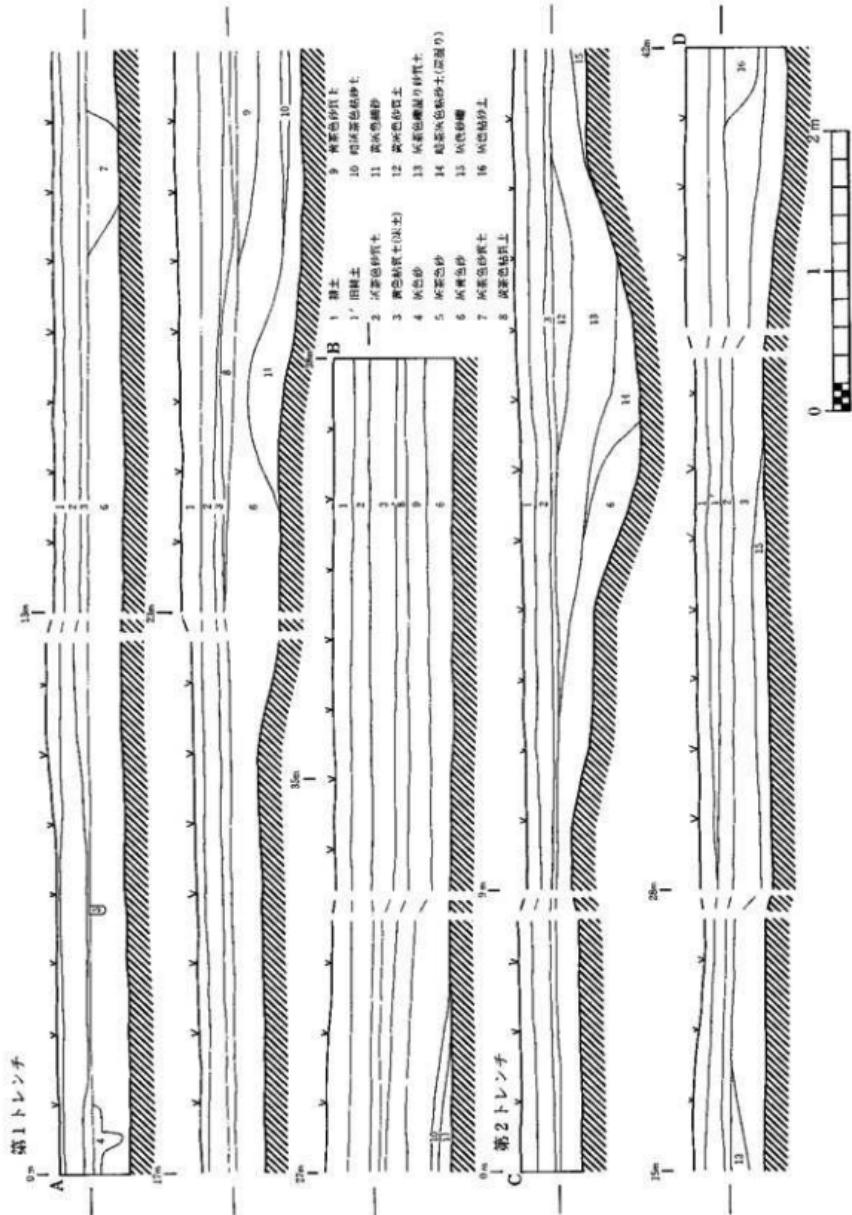
造構

埋め立て工事に先立つ調査である。幅1m・長さ38mの調査塗（第1トレンチ）と、幅1m・長さ42mの調査塗（第2トレンチ）を当該地の両側に設定、重機で掘削し断面観察を実施した。

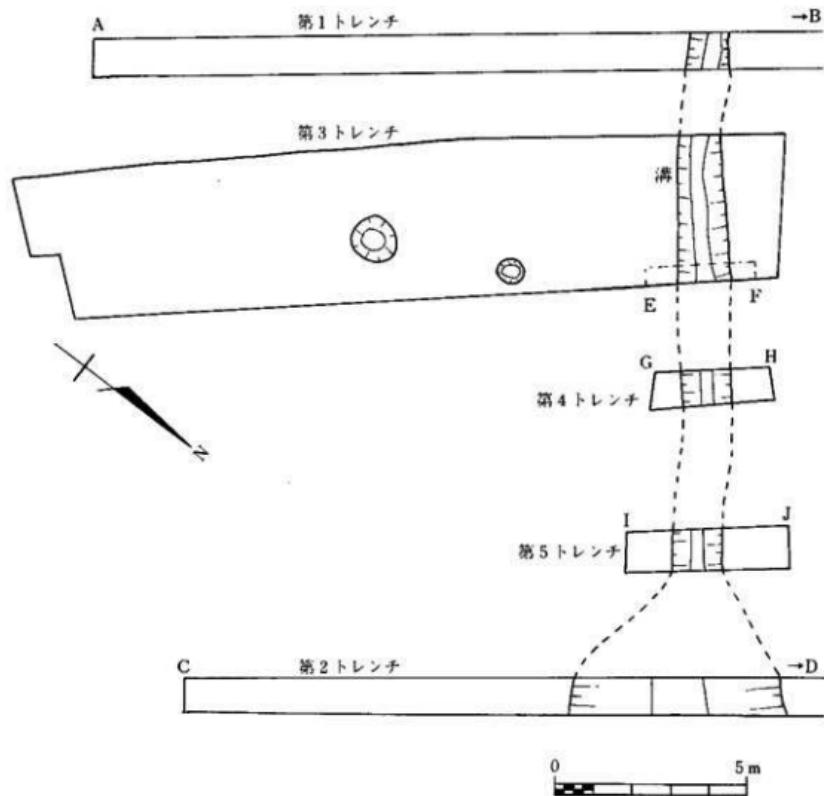
（第4図） 第1トレンチで幅1m・深さ30cm（推定）、第2トレンチで幅4m・深さ60cmの規模の溝を検出した。これらは同一の溝であると思われたが、溝幅が大きく異なるので、両トレンチの間に、幅4m・長さ20m（第3トレンチ）、幅1m・長さ3m（第4トレンチ）、幅1m・長さ4m（第5トレンチ）の3本の調査塗を掘削した。（第5図）その結果、南西から北東方向へ流れる一条の溝であると断定することができた。後述する第2地点溝1の下流部にあたるものと思われる。第3・4・5トレンチにおける溝の規模は、幅1m40・深さ44cm、幅1m40・深さ48cm、幅



第3図 第1地点・第2地点平面図



第4図 第1・第2トレンチ断面図



第5図 遺構図

1m 30・深さ55cmとなる。溝内堆積土は、上部より礫混り灰茶色砂質土・炭及び灰の堆積・砂礫混り暗灰色粘土である。(第6図)

この溝の時期は、出土遺物より古墳時代前期に属するものと思われる。

他に第3トレンチにおいてピットが2個発見されたが時期は不明である。

層序は、全トレンチとも上部より耕土・灰茶色砂質土・黄色粘質土となり、上記溝の存在する遺構面に達する。

出土遺物は、第1トレンチより2・5・18、第2トレンチより1・6・9・12・15、第3トレンチより13・14・16、第5トレンチより3・4・7・8・10・11・17がある。 (坂口)

遺物 (第7・8図)

出土遺物は量的にそれほど多くなく、図示し得た遺物も全部で18点である。そのうちの17点は土師器であり、残りの1点は砥石である。土師器の器種は、壺形土器・變形土器・高杯形土器・鉢形土器・小型丸底土器・製塩土器・手焙り形土器である。

原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、特徴等については遺物観察表に示した。

図示し得た遺物も少ない事から、今回報告分『七ノ坪遺跡』の3つの地点から出土した遺物をそれぞれ比較して分類、観察してみた。

1. 土師器

壺形土器 (1~4)

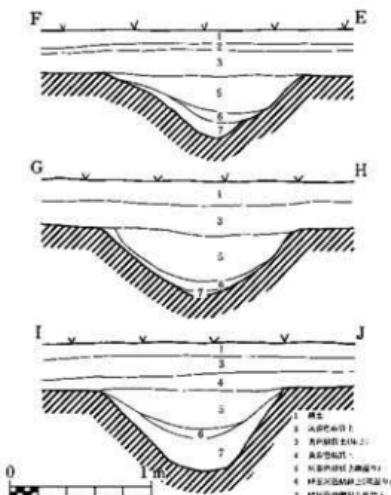
1のタイプは、第2地点 (H I - 5) 出土の筒状口縁を持つもの19~22と同タイプである。外面は二次的な焼成をうけており、もろくなりピンク色に変色し、頸部と口縁部にススの付着がある。2・3のタイプは、第2地点の二重口縁を持つもの27~30と同タイプである。2に比べると3の口縁部の広がりは少なく、屈曲も小さい。4は丸底の底部から腹部にかけて残っており、やや尖りぎみの丸底である。底部から腹部が二次的な焼成をうけており変色していて、1の筒状口縁を持つものと同タイプと思われる。

變形土器 (5~8)

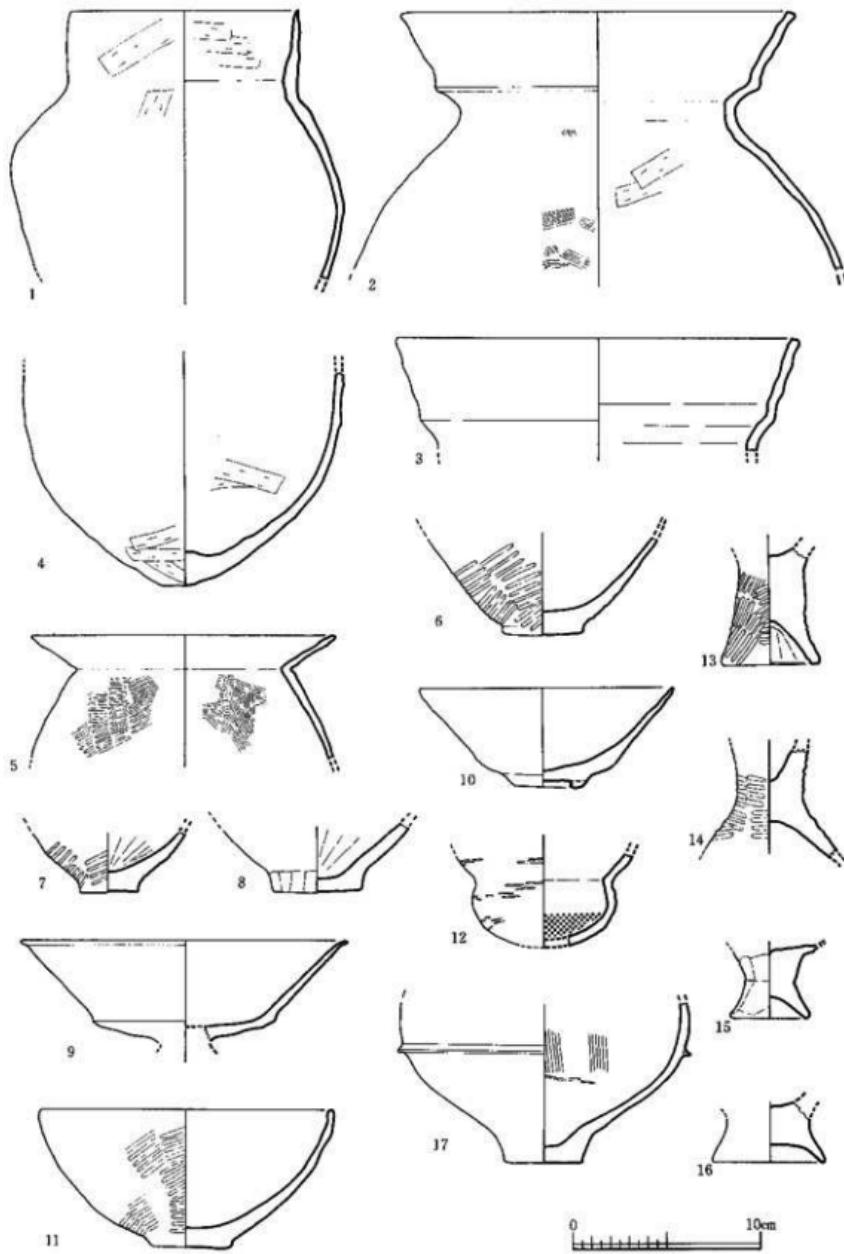
5は細いタキ目の土器で頸部が「く」の字状に屈折する。第2地点の63と同じ傾向をひくものと思われる。6~8は残っているのは底部のみである。6は薄い平底を持つものである。7・8は第2地点の平底のもの35~37の「伝統的第V様式」に属するものと同タイプと思われ、台状でしっかりした平底の底部を持っている。

高杯形土器 (9)

9は杯部のみしか残っていないが、杯部は全体に外広がりであり、口縁端部は極端に外へ広がっている。第3地点 (H I - 6) 出土の高杯形土器の口縁端部とよく似ている。



第6図 溝断面図



第7図 第1地点出土遺物

鉢形土器（10・11）

10は台付きの鉢形土器で、台はあとから杯部に付けられている。11は薄い平底の底部を持ち、外面の調整はタタキ目が施されている。

小型丸底土器（12）

12は口縁部は残されていないが、横に平たい楕円球の胴部を持っている。内側底に朱を入れていたあとが鮮明に残っている。使用の目的で朱を入れたのか、保管の目的で朱を入れたのかはつきりしないが、他に朱を入れたり、朱が付着した土器が出土していない事から、この小型丸底土器は何か特別な目的のために使用されていたのではないかと思われる。

製塙土器（13～16）

出土量の比較的に多い岸和田市土生遺跡では4種に区分しているので参照して分類する。4種区分のaタイプは脚部は台状になり平底のものである。第1地点（H I - 4）では出土していない。bタイプは脚部は幅広がりになり、底部が内側に窪みあげ底になっている。15・16がこのタイプである。15の外面調整はヘラ削りで、二次的な焼成のためにピンク色に変色しもろくなっている。cタイプはbタイプとそれほどタイプ的に変化はないが、脚部が高くなりやや大きい。14がこのタイプである。dタイプは柱状部を持ち、脚部は内側に深く窪みあげ底である。外面調整はタタキ目が施されている。13がこのタイプである。

⑩ 東大阪市内の遺跡からも、製塙土器が出土している。脚部を持つタイプとタコ壺形のタイプの2種類が出土している。第1地点では脚部を持つタイプのみでタコ壺形のタイプの出土はない。大阪府下最南端の岬町の、製塙土器出土が多い小島東遺跡においても分類している。タイプとしては脚部を持つものを「脚台」とし、タコ壺形のものを「丸底」としている。それ以外に壺形製塙土器の出土がある。「脚台」をさらにI式からVI式に分け、「丸底」もI式からIII式に分けて、小島東遺跡の層位から製塙土器の編年を概略している。

手焙り形土器（17）

17は胴部から底部にかけて遺存するものである。岸和田市土生遺跡で小片であるが、胴部片がピット内から出土している。天井部（半ドーム状の覆のついた覆部）と底部が残っていないので比較はできないが、副部中央よりやや下に、上向きの一条の凸帯が付けられており、17も下向きではあるが一条の凸帯が付けられている。

手焙り形土器にはタイプがかなりあるようと思われるが、特に底部に注意してみてみると、丸底のものと平底のものの2タイプがある。17はややしっかりした平底の底部を持つものである。

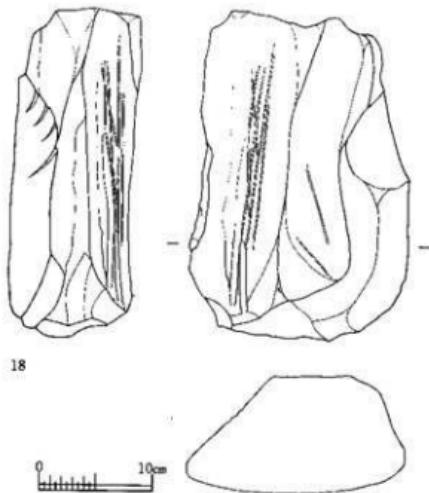
⑪ 豊中・古池遺跡においても丸底の手焙り形土器が出土している。

2. その他の遺物

砥石 (18)

材質は砂岩であり、質は軟質で目が粗い。使用による摩滅がはげしく、使用面は2面であり数条の浅い溝が走る。最大長28.2cmで最大高10.4cmである。

(楠山)



第8図 第1地点砥石

第2地点 泉大津市北豊中町1丁目2-15 (第3図)

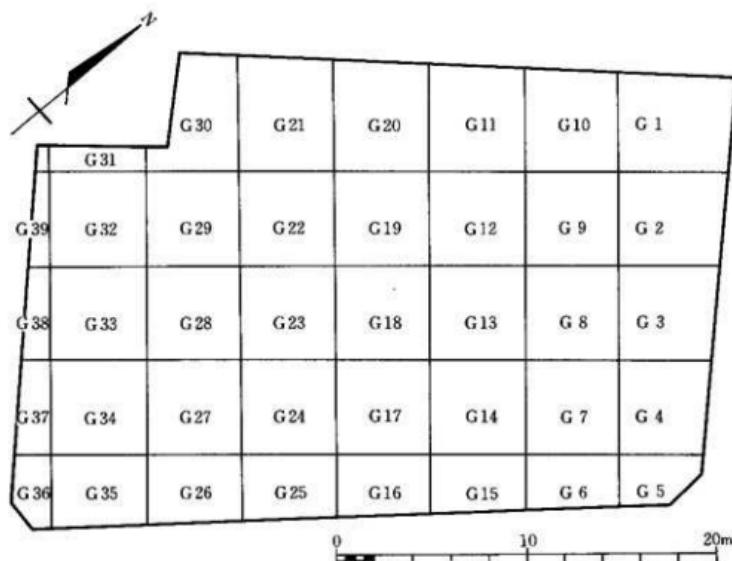
遺構

保育所の建設に先き立つ調査である。府立泉大津高等学校内より、古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓・土塹等が発見され遺跡の中心部と思われる。本調査地点は同校の北側に接するところから発掘調査を実施する事になった。調査は、重機を使用して耕土の除去を行なったが、上置き場の関係から2回に分けて調査を行なった。耕土を除去後の掘削にあたり、5m四方のグリッドを設けた。(第9図)

調査により検出した遺構は、溝2本・掘立柱建物1棟のみであった。

層序

調査実施前まで畠地であったため、盛土はされていなかった。遺構面までの層序は、耕土・床



第9図 第2地点調査区割図

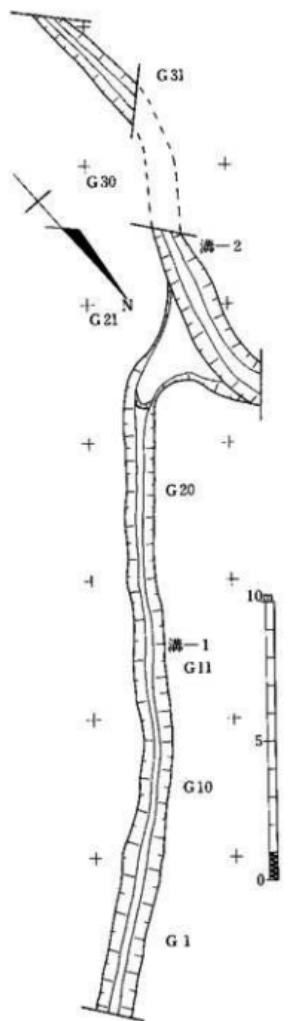
土・黄色粘質土（整地層）であり、黄灰色砂質土の上面が遺構面である。現地表面（耕土）から遺構面までの深さは40cmから60cmを測る。溝-1からの出土遺物が大半であるが、黄色粘質土（整地層）からは須恵器片・瓦器片・羽釜片・備前變片・製塙土器脚（土師器）・平底甕（土師器）の出土があり、遺構上面からは、須恵器片・土師器片・備前摺鉢片・羽釜片・瓦器碗片・青磁片・白磁片の出土がある。

溝-1（第10図）

グリッド1・10・11・20の間を北東より南西方向に延び、21で北西方向に曲り溝-2と切り合う溝である。規模は巾1mから1m30cm・深さ30cmから60cmを測り、形はU字形を呈する。溝内の埋土を観察するため、グリッドのアゼゴとに断面を残した。若干の流れがあったものと思われ、上層の灰茶色礫混り土以外の埋土については、各断面ごとに異なるが、全ての断面で認められる埋土は、暗茶色土・灰色粘砂土であった。ことに、灰色粘砂土に至っては、底面に広がり帯状に延びていることから、流れがあったと推測できるものである。

（出土遺物）（第12～19図）

埋土中より多くの、土器類が出土した。中でも灰茶色礫混り土からの出土が多く、布留式傾向



第10図 溝-1・2平面図

の甕が多く認められ、その他に高杯・小型器台・小型鉢・小型丸底土器・複合口縁臺・広口状口縁臺などがあげられる。これら遺物の出土状態は、溝内の中ほどに集中して破棄されている。特にグリッド10・11にあたるところに集中し、出土遺物全体の5割以上にあたる。

溝-2 (第10図)

南西側のグリッド31から延びグリッド30で曲り、溝-1を切る溝である。規模は巾1mから1m40cm・深さ50cmから57cmを測り、形は浅いU字形を呈する。溝内埋土は暗茶色土である。

(出土遺物) (第19図)

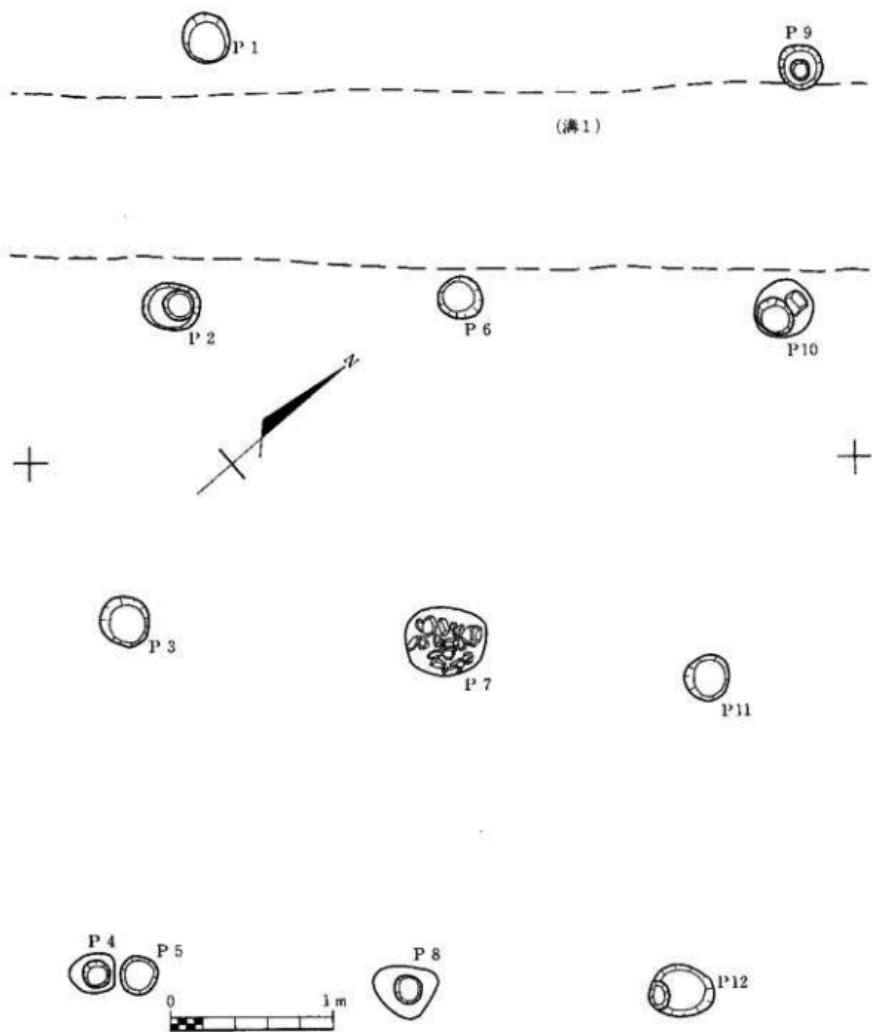
ほぼ全体から出土したが、グリッド30の北西壁よりで多量の土器類が出土した。器種はタタキ目を施した甕や、平底甕・布留式の甕・高杯・甕の破片、小型丸底土器・小型甕(底部平底)・布留式傾向の甕・鉢であるが、多くは破片である。

掘立柱建物 (第11図)

溝-1をまたぐ様にして建つ2間×2間の総柱に2個の柱穴(P1・P9)を持つ建物である。ピット径は一番小さいのが22cmで一番大きいのが48cmで、深さは10cm前後から約27cmである。ピット内埋土は、灰色砂質土である。出土遺物は全く認められなかったが、東柱にあたるピットの底部からは5cm程度の小石が20個近く敷かれた様になっていた。総柱の北側のピット内にも縦最大長13cm、横最大長11cmの石が出土している。

(その他の出土遺物)

溝-1の東岸上に、タタキ目を施した甕が4個体が完形や完形に近い状態で出土した。遺物は溝-1を検出した面の黄灰色砂質土中に入っていた。このため掘り方の確認を行なったが全く認められなかった。



第11図 捩立柱建物

まとめ

本調査地は、七ノ坪遺跡の中心部と推定されるところに背しているにもかかわらず、検出した遺構は非常に少なものであった。ことに溝一の北東部分は比較的地面の安定しているところと思われる部分であったが、遺構が全く認められなかった。このため後にトレンチを設け土層の観察を行なった結果、溝一の遺構面の層（黄灰色砂質土）が約30cmから50cmの厚さで堆積していることが認められただけであった。

検出した溝一は、直線的に北東部に延びていることが確認され、さらに先の第1調査地点において検出した溝と方向・規模・出土遺物の類似するところから同一溝と推定される。また溝内より出土した遺物は一括で把握できるもので、器種も豊富であり今後の整理・解明が行なわれるならば、非常に良い資料となりえるといえる。

補足

各所でトレンチを設け、土層の観察を行なった結果、南側より広がる砂礫層（床土下に位置する）は北側へ傾斜し、調査区中ほどで検出遺構面下に潜っていることを確認した。しかし砂礫層は何回にも渡って堆積し、また土器片が含まれていることが認められた。ことにグリット32の東アゼに沿って設けたトレンチの約50cm下の砂礫層中からは、タタキ目を施した土器片が出土した。これらのことから、南に広がる砂礫層は、さして古い堆積ではないと思われるが、このような遺物を含む土砂の流れを解明するため、今後の発掘調査に期待するところである。

（貴志）

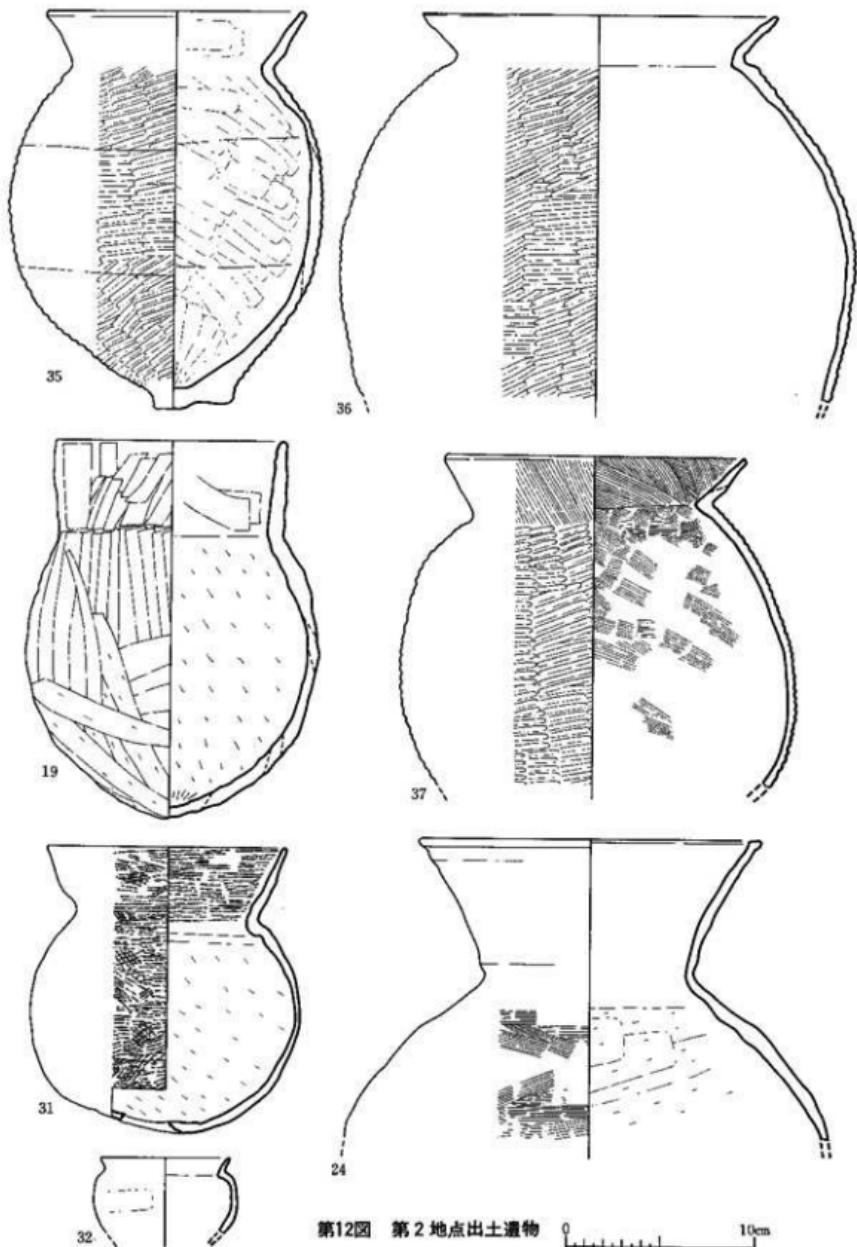
遺物（第12～20図）

出土遺物は土器および土製品と石器である。図示し得た遺物は約100点近くあり、大部分が土師器で他に須恵器2点、土製支脚1点、石器1点である。図示はし得なかつたが写真のみの遺物に青磁3点、白磁2点、變形土器の胴部片1点ある。

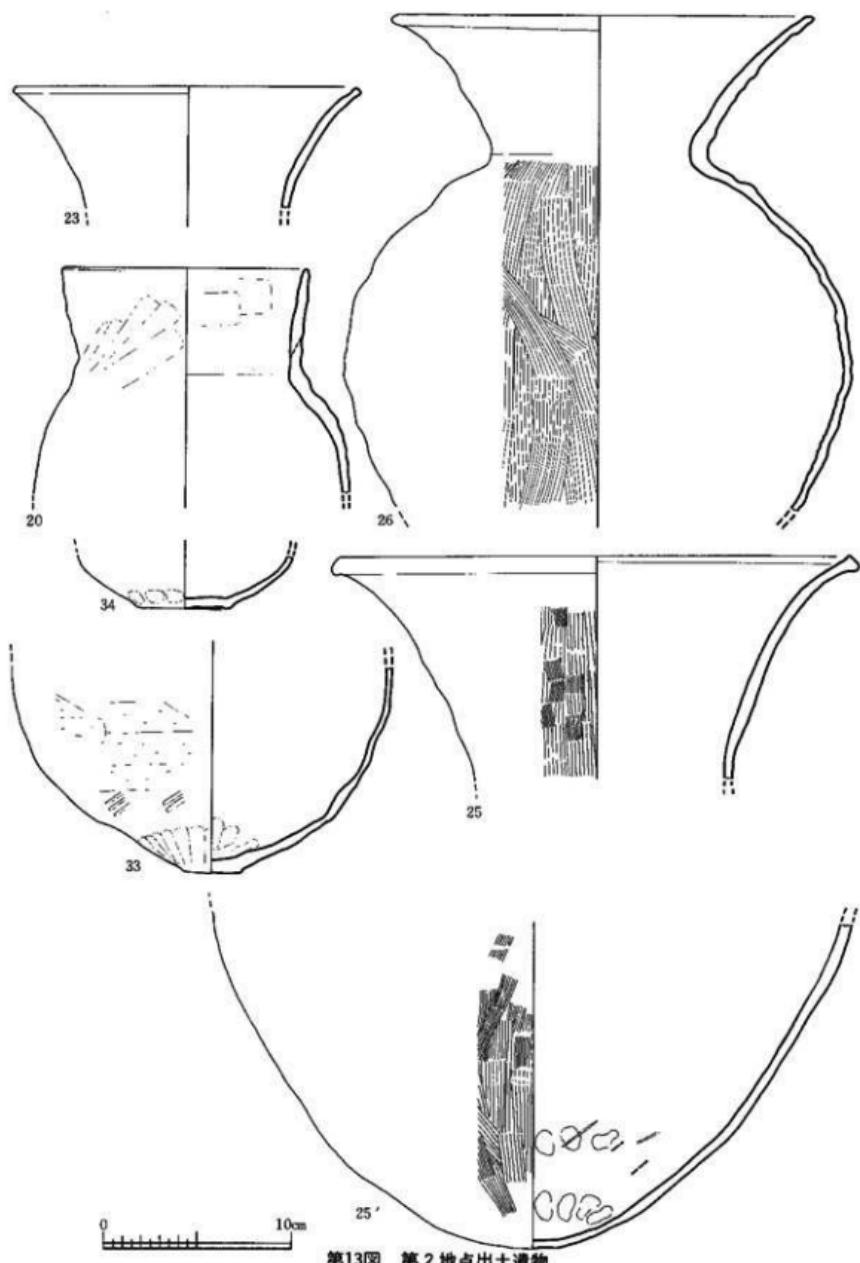
土師器の内分けは、壺形土器16点、變形土器29点、高杯形土器13点、鉢形土器13点、低脚杯形土器1点、器台形土器7点、小型丸底土器11点、製塩土器3点である。

遺物は、溝一の東岸上・黄灰色砂質土層から3点出土と、遺構上面から6点出土と、黄灰色砂質土層から1点出土と、包含層から4点出土し、それ以外は溝一・2内からの出土である。時代的には古墳時代の遺物が大半であるが、古墳時代以降の遺物も少しある。

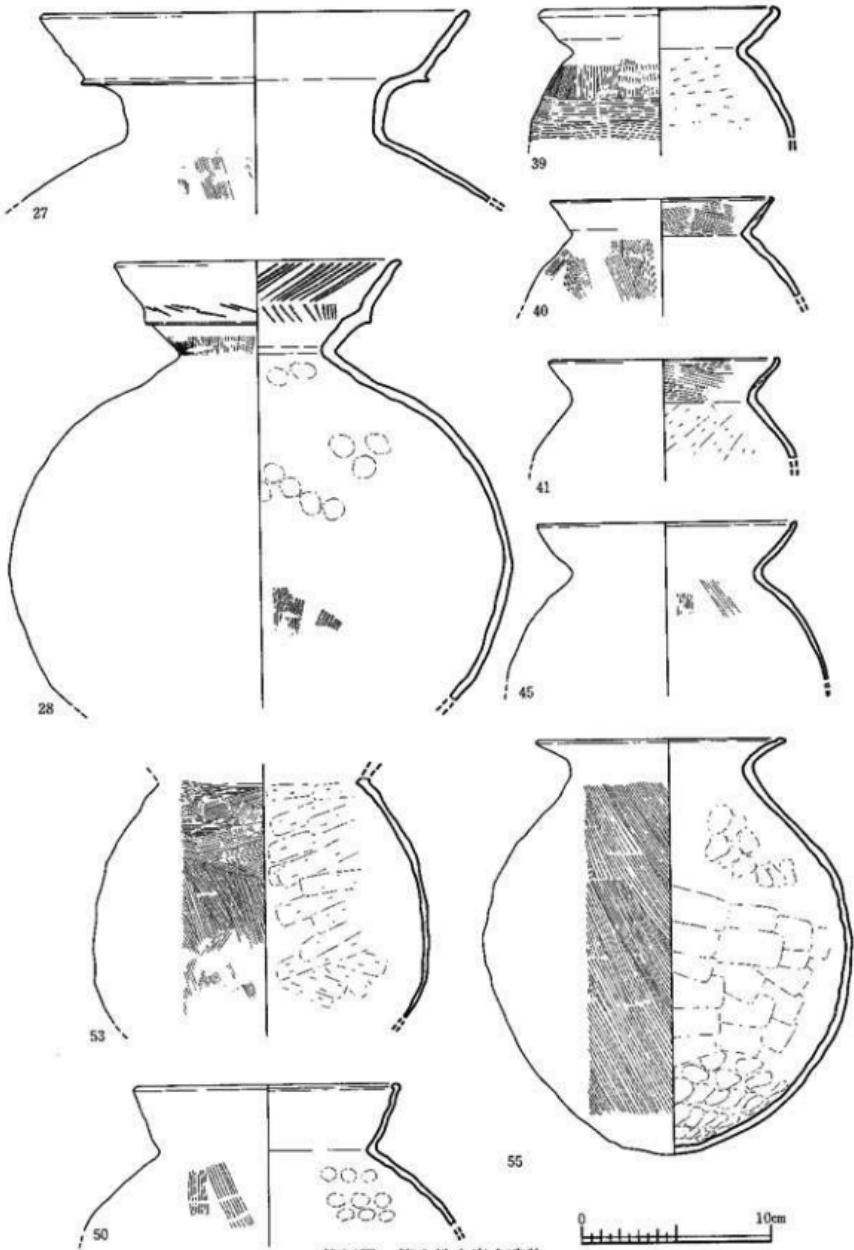
原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、特徴等については遺物観察表に示した。



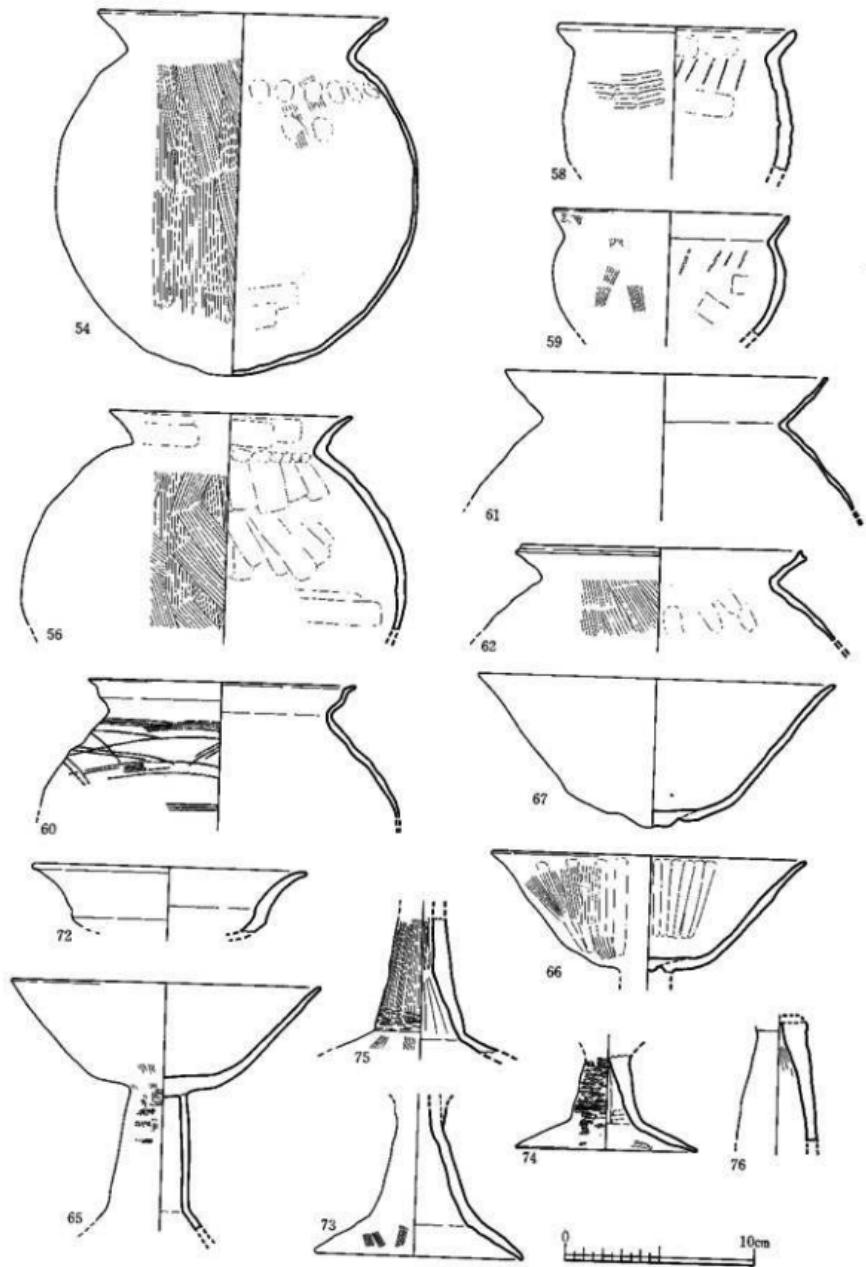
第12図 第2地点出土遺物



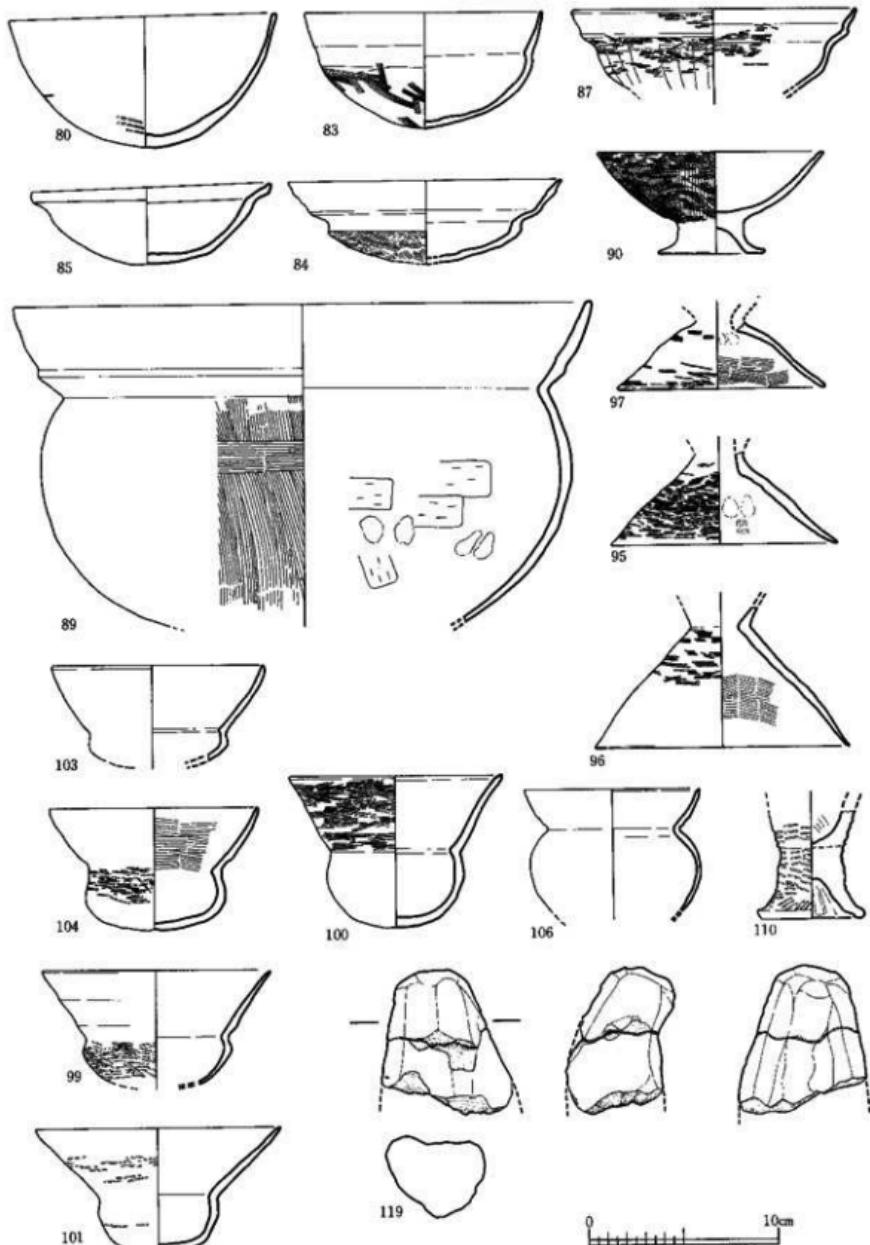
第13図 第2地点出土遺物



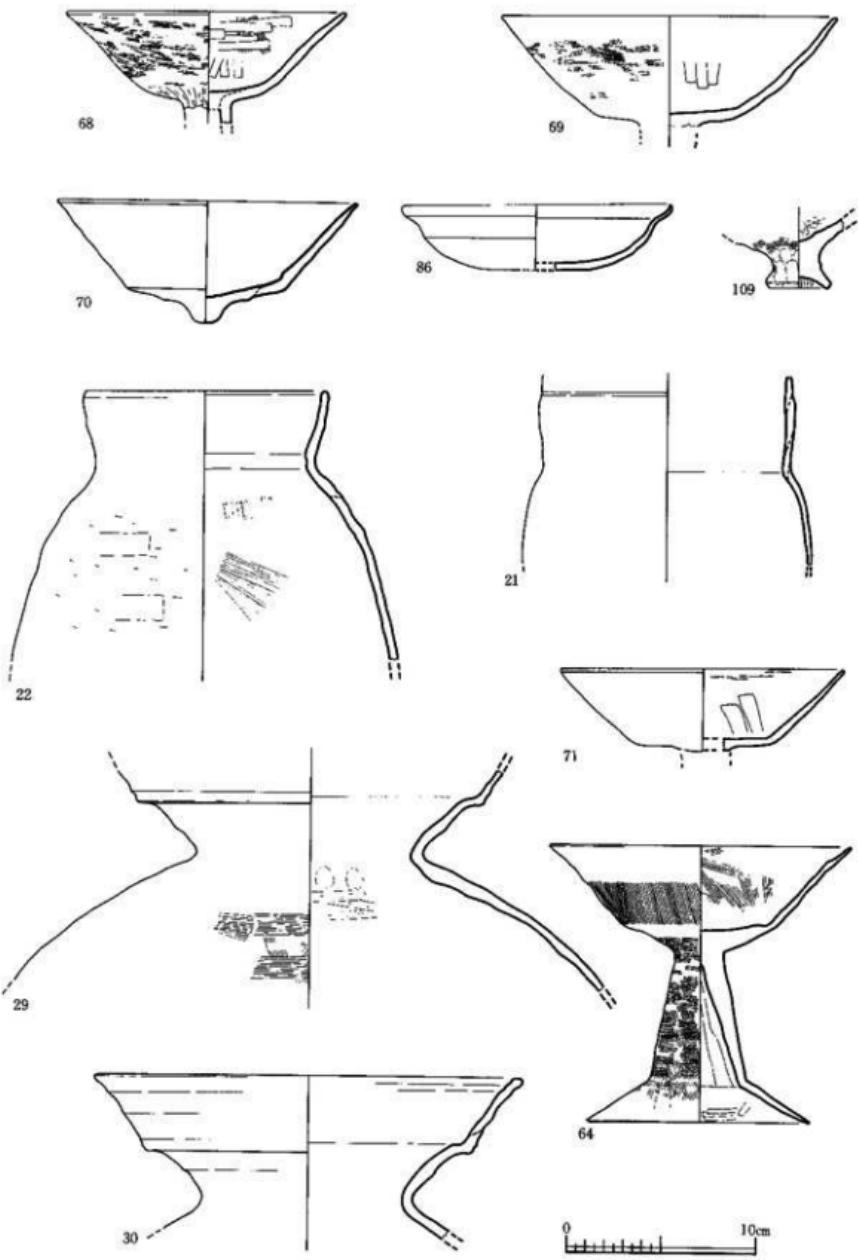
第14図 第2地点出土遺物



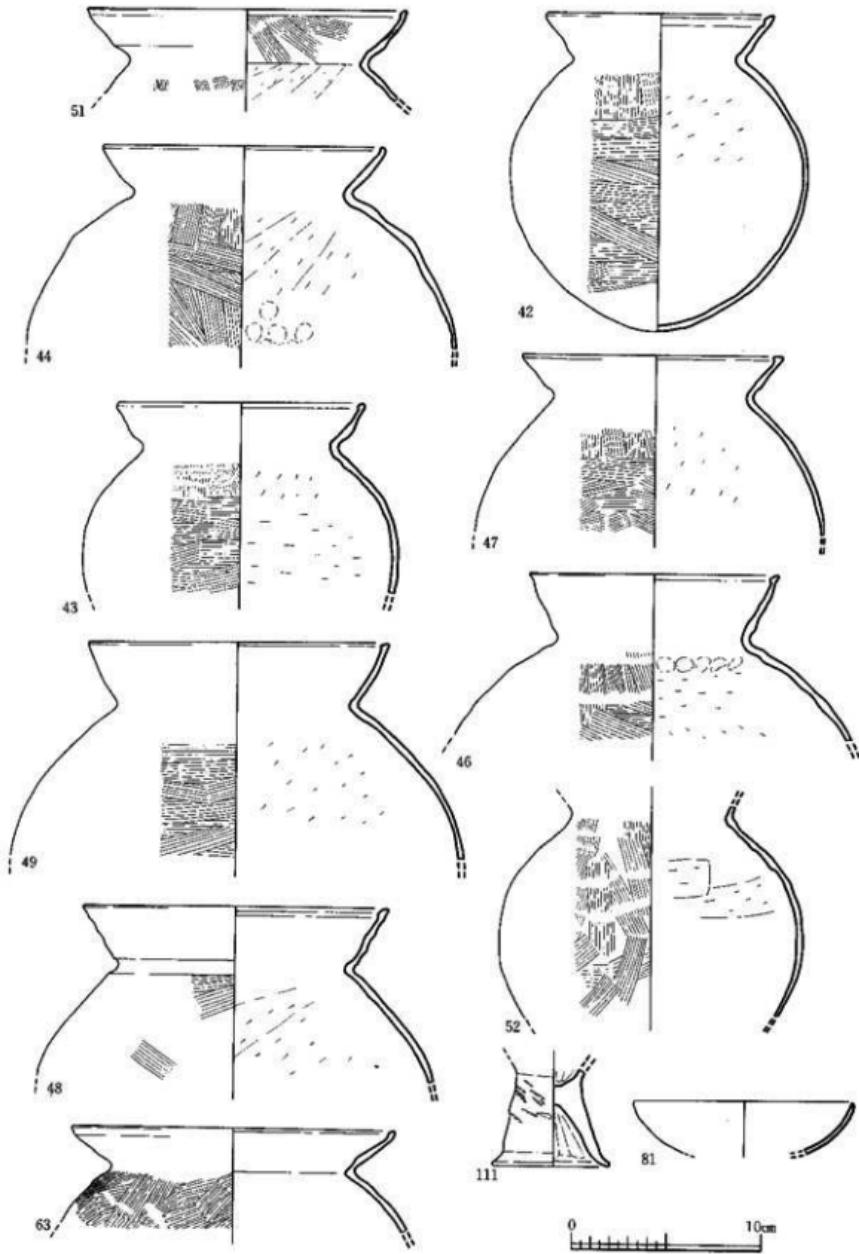
第15図 第2地点出土遺物



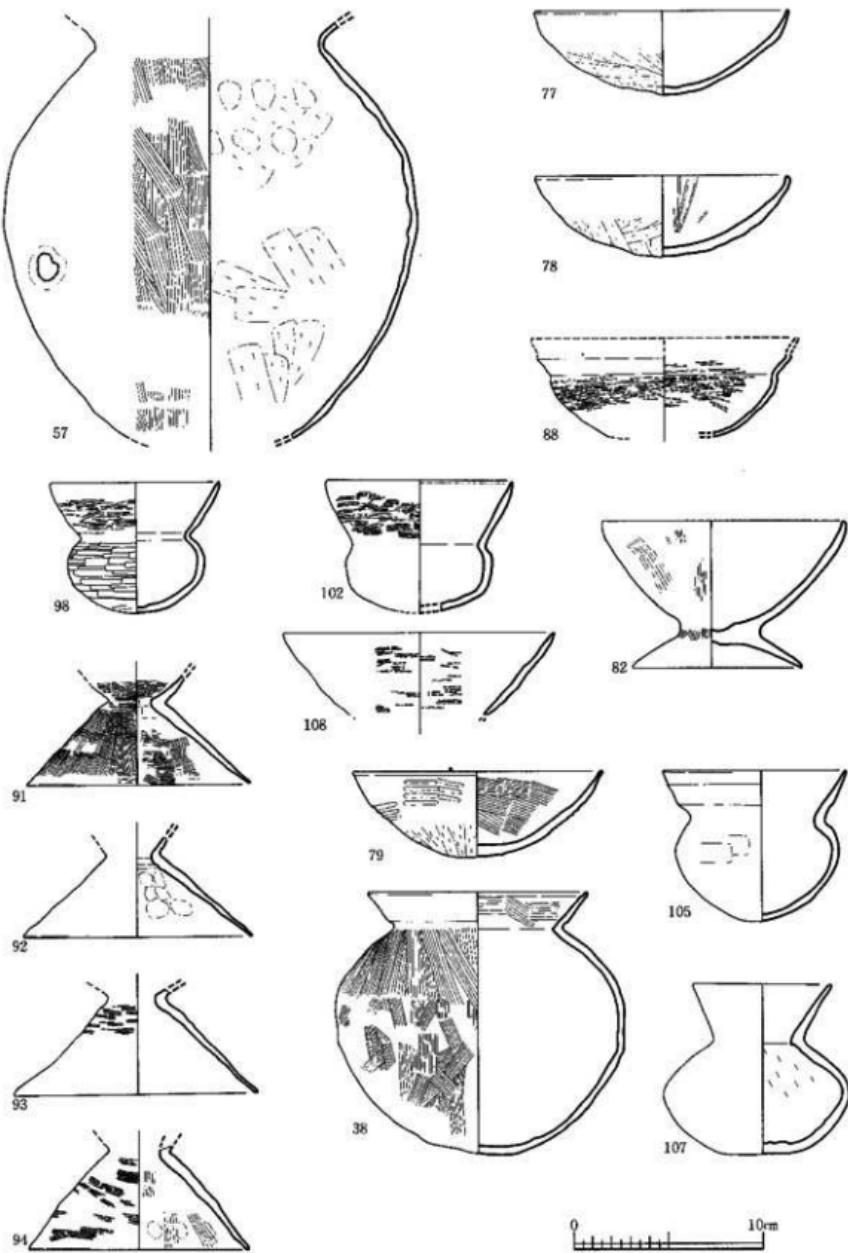
第16図 第2地点出土遺物



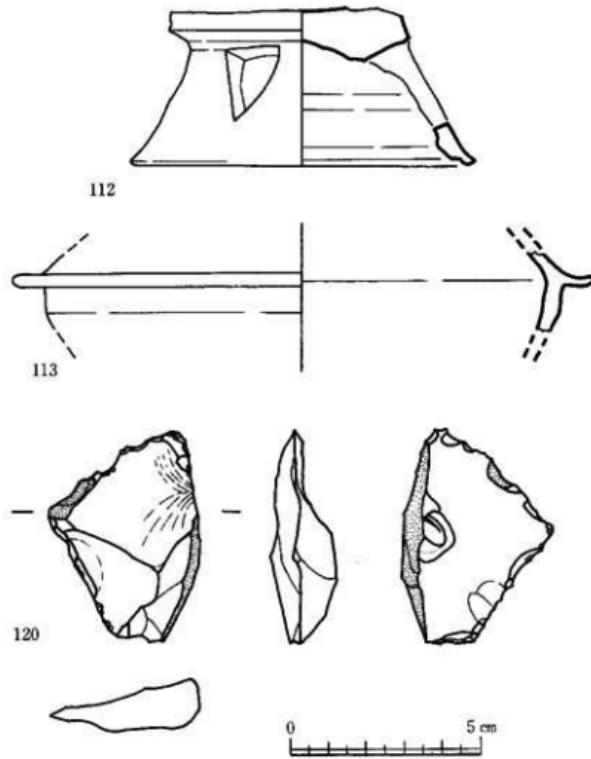
第17図 第2地点出土遺物



第18図 第2地点出土遺物



第19図 第2地点出土遺物



第20図 第2地点出土遺物

1. 土師器

壺形土器 (19~34)

出土した壺形土器のタイプを口縁に特徴のある、筒状口縁を持つものと、ラッパ状(広口状)口縁を持つものと、二重(複合)口縁を持つものと、底部に特徴のある、丸底のものと、平底のものとの5タイプに大別してみた。

筒状口縁をもつもの19~22のタイプは、口縁部の立ち上がりがほぼ真っ直ぐである。胴部は梢円錐で底部はやや丸みを帯びている。外面は二次的な焼成のために、19は赤っぽい色に、21は乳褐色に、22は赤黒色にそれぞれ変色し、剥離がはげしくもろくなっている。

ラッパ状口縁を持つもの23~26のタイプは、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、大きく口縁部が広がる。ラッパの口のようなのでこの表現を使用した。このタイプは筒状口縁を持つものに比べてやや大型である。胴部は楕円球で、底部はやや丸みを帯びている。外面の調整は筒状口縁を持つものがヨコヘラ削り・タテヘラ削りであるのに対して、ラッパ状口縁を持つものは大小のハケを使用したハケ目である。25は口縁部で25'は底部である。胴部が残ってなく接合不可能なため分けたが、あきらかに1個体の遺物である。

二重口縁を持つもの27~30のタイプは、ラッパ状口縁部が屈曲して二段になっている。他の部分はラッパ状口縁を持つものと似ている。28は口縁部内外面に放射状にクシ状のもので押したあとが残る。外面は屈曲部分より上部でクシ状の巾は1mm程度である。内面は屈曲部分の上下部にクシ状の押し痕が残り、屈曲部分より上部は右斜め上方から左斜め下方への傾きがあるのに対し、下部のクシ状の押し痕は左斜めから右斜めへの傾きである。

31は丸底のもので口縁部は短くこころもち外反しているが、頸部径と口径とにそれほどの差はない。胴部は球形であり底部はまん丸である。底部には直径2.3cm程度の穿孔が内側からあけられている。

32は小型（ミニチュア）の壺形土器である。胴部の小さくて横に平たい部分は小型丸底土器にも似ているが、頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は外反しており、立ち上りは極端に短い。口径は6.9cmで器高は4cmあまりである。

底部として図示し得た遺物は33・34の2点である。いずれも平底の底部を持つものである。34の底部はほんの少しではあるが作り出し高台のようになっている。

壺形土器（35~63）

出土した壺形土器のタイプを平底のものと、丸底のものと、尖底のものと、小型のものとの4タイプに大別し、どれにも属さないものはその他とした。

平底のもの35~37のタイプは、「く」の字状に屈折する頸部を持ち外面調整はタタキ目であり、縦に長い楕円球の胴部を持つ。35の胴部は上・中・下の三分割成形法である。この技法は畿内第V様式土器の三技法の1つである。都出比呂志氏は畿内第V様式土器を特色づける製作技法を、①タタキ技法、②底部輪台技法、③分割成形技法であるとしている。35の胴部の上部分は左下がりのタタキ目が残り、中部分は水平に近いタタキ目で、下部分は左下がりのタタキ目が残っており、二ヶ所の接目（接合部）が見られる。底部は台状でしっかりした平底である。七ノ坪遺跡において、平底の底部を持ちタタキ目調整の壺形土器が布留式傾向の土器と共に出土している。36・37の底部は残っていないが、35と同様の平底の底部であると思われるが少し大型である。35~37は「伝統的第V様式」に属すると思われる。

丸底のもの38~53のタイプは、布留式の特徴を持つもので布留式傾向に属している。球形および縦に長い楕円球の調部を持ち、底部は全て丸底である。口縁部は内寄気味に立ち上る。31は底部に直径2.3cmの穿孔が内側からあけられている。

尖底のもの54~57のタイプは、河内系の土器で和泉に搬入されたと考えられる。「く」の字状に屈折する頸部を持ち、口縁部の立ち上りは大きく外反してそり返っている。57は腹部に楕円形の穿孔が内側からあけられている。

小型のもの58~59のタイプは、58は底部は残っていないが、平底のもの35~37と同じ「伝統的第V様式」に属するものと思われる。

60は口縁部が「S」字状になっており、東海系の土器で和泉に搬入されたと考えられる。昭和33年に増井義己氏が「S字状口縁」斐形土器の名称を使用したのが最初である。「S字状口縁」斐形土器に類似した土器に「受口状口縁」斐形土器というのがあり、「受口状口縁」は近江地域を中心とする近江系土器であり、「S字状口縁」は伊勢湾・東海西部地域を中心とする東海系土器である。60の斐形土器は肩部に橢状のものかへラ状のもので不規則ではあるが深い描き目が施されている。これは「S字状口縁」斐形土器の特徴の1つである。

61は器壁が薄く口縁端部が丸く整えられている。

62は口縁端部が押さえられ凹状になっている。

63は細かいタタキ目調整の土器で上田町II式に属する。

高杯形土器 (64~76)

出土した高杯形土器で岡山し得た遺物は完形品が64~65の2点で、それ以外は杯部のみのもの66~72と、脚部のみのもの73~76である。64~71の杯部のタイプは全体に外広がりである。72の杯部はそり返って外反する口縁部である。脚部のみのものについては、73は脚部上部からなだらかに外へ広がる柱状部を持ち裾部へつながる。74~75の柱状部はなだらかに広がり裾部が大きく外へ広がる。76裾部が残っていないのははっきりしないが、74~75のタイプと同じと思われる。

鉢形土器 (77~89)

出土した鉢形土器を鉢形のものと、脚付きのものと、口縁が有段のものと、大型のものとに分けた。

鉢形のもの77~81のうち77~79は浅めであり、口縁は上方になめらかに広がる鉢形土器である。77~78は調整も同じである。79は口縁部にタタキ目が残っている。80は深い鉢形土器である。77~80は斐形土器製作技法の1つである三分割成形技法で作られた底部と同じものと思われる。分割成形技法による斐形土器製作中に底部のみを器として使用したものと思われる。81は小型で浅い鉢形土器で、焼成があまり良くなくもろくなっている。

脚付きのもの82は深い鉢形土器に裾の広がった脚部を持っている。七ノ坪遺跡においてよく似たのが出土しているが観察がなく、器種も高杯形土器として分類している。鉢形土器に分類してみたが根拠があるわけではなく高杯形土器であるかも知れないが便宜上分類した。名称的には脚付き椀形土器がよいと思われる。

口縁が有段のもの83～88は鉢形の口縁部が丸く曲げて段になっている。83は深い二重口縁であり、浅くしたのが84である。両方共に外面部の調整はハケ目である。85・86は厚さに差があるが、タイプ的には同じでありやはり二重口縁であるが、口縁端部が上へ持ちあげられている。

87・88は小型器台形土器、小型丸底土器と共に小型三種土器の一つである小型鉢形土器に分類されるものである。外面は綿密なヘラ磨きが施されており、他の小型三種土器と同じ化粧土が施されていると思われる、口縁部は「S」字状になっている。

大型のもの89は口径30.8cmの大きな鉢形土器であり、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部の外面調整はタテハケ目で肩部だけタテハケ目の上に筋のヨコハケ目が施され、そのためにタテハケ目が消されている。

低脚杯形土器（90）

出土した低脚部を持つ杯、低脚杯形土器は1点である。器種的（形式的）には深い鉢形土器の杯状部に脚が付属したものであり、台付き鉢形土器又は脚付き鉢形土器として鉢形土器に分類してもいいが、同タイプの土器が鳥取県倉吉市櫛塚遺跡において低脚杯として分類されているので参考にした。低脚部の裾が広く外反してラッパ状に開く、低脚杯形土器のタイプをA類B類に分類している。A類はラッパ状に開く大型の脚部を持つもので、B類は脚部が低くラッパ状に開く小型のもので、90はB類に属すると思われる。低脚杯形土器は山陰地域に多くみられる、山陰固有の特徴を示す土器である。

器台形土器（91～97）

器台形土器のタイプには山陰地域独特の鼓形器台や小型器台といわれている皿状の受部を持つものなどがあるが、出土した器台形土器のタイプは「ハ」の字状に広がる脚部で、残ってはいないが「逆ハ」の字状の受部を持つもので、接合部は中が空洞になっている。横からの断面は「ハ」の字状にこころもち小さな「逆ハ」の字状を合わせた「くく」の器形である。小型三種土器の小型器台形土器に分類されるもので、外面は綿密なヘラ磨きが施されており、化粧土も施されていると思われる。外面調整は全体的にすこぶる丁寧であり、粘土も良質のものを使用している。91は綿密なタテハケ目のうえヘラ磨きをしている。

泉大津市農中・古池遺跡や岸和田市土生遺跡出土の器台形土器は皿状の受部を持つものであり、現在和泉地域には「逆ハ」の字状の受部を持つタイプの出土はほとんどない。奈良県桜井市櫛向

遺跡においては同タイプのものが2点ほど出土しており、うち1点は完形品であり、「ハ」の字状に広がる脚部にこころもち小さい「逆ハ」の字状の受部を持っている。他にタイプ的には似ているが受部と脚部の間に中が空洞の柱状部を持つものがある。

小型丸底土器（98～108）

小型丸底土器の名称は今のところ多種多様で一定していない。名称としては小型丸底壺・小型丸底土器・罐内型小型丸底壺・小型丸底壺形土器・壺形土器等である。

出土した小型丸底土器は、口縁部が大きく広がり胴部が横に平たい楕円球で底部が丸みをおびているものと、小型で底部の丸い壺形のものに大きく分類し、それ以外に形的に分からぬのが2点ある。口縁部が大きく広がるものは98～104で、小型三種土器の特徴にみられる化粧土が全面に施されており緻密なヘラ磨き調整で粘土も良質のものを使用している。小型で壺形のもの105・106は口縁部の立ち上りが短く、頭部がヨコナデで深く削られている。それ以外ものは107・108の2点で107は底部が平たくなっているので仮に小型平底土器と呼ぶ事にする。この土器が壺形土器と呼ばれているものなのか。タイプ的には口縁部が広がり横に平たい楕円球の胴部で、安定の良いように平底になっている。口縁部の広がりも小さく胴部最大径より口径の方が狭く、外側調整もヨコナデである。98～104のタイプの変形されたものなのか、まったく器種が異なるものなのか不明である。108は外側調整がヘラ磨きである事から、小型丸底土器の口縁部と思われる。口縁部が大きく広がりを持っているので98～104のタイプと同じと考えられる。

製塙土器（109～111）

出土した製塙土器は3点である。109は脚部が広がり底部が内側に窪んであげ底になっている。外側調整はヘラ削りが施されている。110・111は脚部が高くなり底部の内側への窪みが大きい。110の外側調整は全面がタタキ目で、111はタタキ目とも思われるがタタキ目を真似るようにヘラ押し痕らしきものが不規則に10ヶ所ほど残っている。

2. その他の遺物

須恵器（112・113）

112は高杯の脚部でこころもち外へ開き等間隔に3ヶ所に逆三角形の透し孔がある。5世紀頃でII型式第1段階に属する。113は杯の受部片で立ち上りは内傾しながら上にのびており、受部は水平に外にのびる。

青磁・白磁（114～118）

出土した青磁は114～116の3点、白磁117・118の2点の合計5点である。全て細片であるために写真のみとした。青磁114・115は底部片であり114は造り出し高台になっている。白磁117は口

縁片であり口縁端部が極端に外反している。

土製支脚 (119)

出土した土製支脚は1つである。土製支脚は1つで役割をはたすのではなく、同型のもの3つで1セットとして使用されていたと思われる。出土したタイプは鳥帽子状の土製支脚であり、同地区内から鳥帽子状の土製支脚片が数個出土している。図示し得るほどの遺物ではないが、あきらかに土製支脚の破片であると確認できた。

奈良県桜井市櫻向遺跡において土製支脚が14点出土している。鳥帽子状の土製支脚9点と、角状の突起を2本持つ土製支脚4点と、断面台形の小型の支脚が1点である。鳥帽子状は櫻向2式・3式にそれぞれ1点で、それ以外の7点は櫻向4式である。4式になってから角状の突起を2本持つものが新しく加わる。角状の突起を2本持つものは全て台が中空になっている。

泉大津市豊中・古池遺跡において角状の突起を2本持つ形式のものが1点出土している。七ノ坪遺跡は豊中・古池遺跡に隣接する遺跡である。

大阪府下において土製支脚の出土量は極めて少なく、豊中市原田遺跡出土の鳥帽子状の土製支脚1点、府下ではないが兵庫県伊丹市中村遺跡（大阪空港A遺跡）出土の角状の突起を持つ土製支脚1点を加えても数点と思われる。

石器 (120)

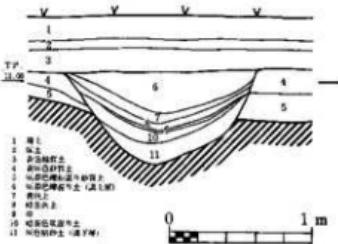
材質はサスカイトであり、形は二等辺三角形の剝片である。一辺が人為的に両面調整していると思われ、不定形刃器の可能性があるが使用痕がみとめられない。最大長5.6cm、最大厚1.7cmである。

変形土器肩部片 (121)

上師器変形土器の肩部から腹部にかけての破片であるために図示はせず写真のみとした。外面調整は細かい左上から右下に流れるハケ目であり、そのうえからハケ目に交わるように放射状にヘラの先で深く削った文様が残っている。

3. 溝-1 出土土師器 (付表) (第21図)

溝-1 から出土した土師器83点を、器種別に分類し上層・中層・下層の3層に分け各数量と遺物番号を溝-1 出土土師器一覧表に示した。溝-1 の幅は約1m 40cmで、深さは65cmである。層位的には6層確認されたが、上層(6)・下層(11)の堆積は厚いが中層を形成する4層(7・8・9・10)は層位的にとらえるのが困難であるため4層を中層とした。中層出土



第21図 溝-1 断面図

遺物高杯形土器3点・鉢形土器1点・製塙土器1点は全て暗茶色土層出土である。土師器のみにおいてだけ一覧表に示したが、烏帽子状の土製支脚は溝1の上層からの出土である。(楠山)

付表 溝1 出土土師器一覧表

	上 层		中 層		下 層		合 計
	数量	遺 物番 号	数量	遺 物番 号	数量	遺 物番 号	
高杯形土器	12点	19・20・23・24・25 26・27・28・31・32 33・34	0点	—	4点	21・22・29・30	16点
變形土器	14点	39・40・41・45・50 53・54・55・56・58 59・60・61・62	0点	—	10点	42・43・44・46・47 48・49・51・52・57	24点
高杯形土器	8点	65・66・67・72・73 74・75・76	3点	68・69・70	2点	64・71	13点
鉢形土器	6点	80・83・84・85・87 89	1点	86	4点	77・78・82・88	11点
低脚杯形土器	1点	90	0点	—	0点	—	1点
器台形土器	3点	95・96・97	0点	—	4点	91・92・93・94	7点
小型丸底土器	6点	99・100・101・103 104・106	0点	—	3点	98・102・108	9点
製塙土器	1点	110	1点	109	0点	—	2点
合計	51点		5点		27点		83点

第3地点 泉大津市北豊中町618-1 (第22図)

遺構

埋め立て工事に先立つ調査で、16m×15mの規模の調査域を設定し、重機で耕土を除去、その後人力により掘削を行った。

層序を見ると、耕土の下は茶灰色土・灰黄色土となり、灰黄色土の上面は中世の遺構面であった。遺構としては溝が3条検出されたのみである。3条とも南東方向から北西方向へ平行に流路をもつもので、南側より、溝1・溝2・溝3とした。(第23図) 以下各溝ごとに記述する。

溝1

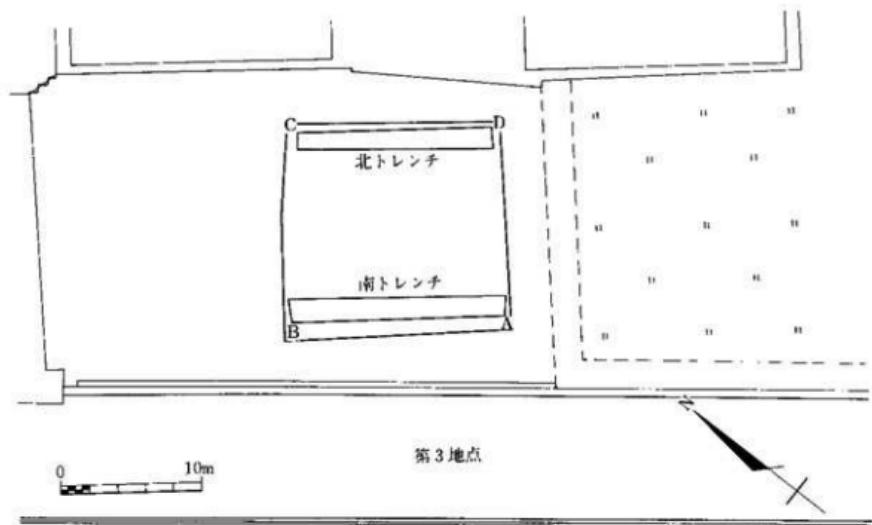
幅30cm・深さ1cmと規模の小さい溝である。上部は削平されて、底部のみが残ったものと思われる。一部途切れている箇所がある。

溝2

幅1m・深さ5cmの規模で、途中で浅くなってしまっており、削平のため途切れたものと思われる。

溝3

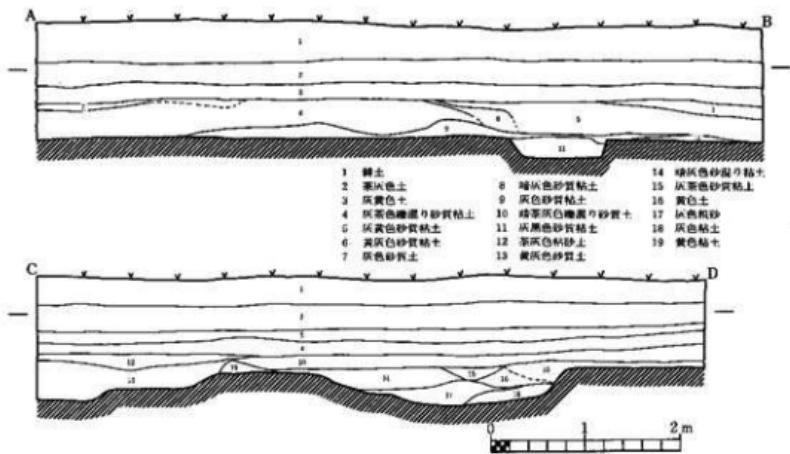
幅1m20cm・深さ5cmの規模であるが、残存部は少ない。



第22図 第3地点平面図



第23図 遺構図



第24図 断面図

いづれも規模が小さく浅いうえに、途中で途切れている部分もあるところから、後世において削平され、底部の一部が残ったものと思われる。溝内より遺物は検出されなかったため、時期を判断する材料に欠けるのであるが、堆積土より考えて中世頃の溝であろうと思われる。

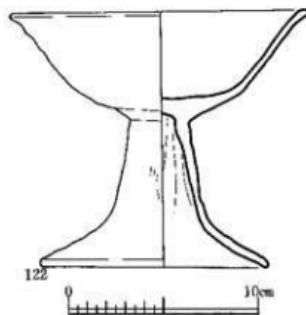
他に遺構は検出されなかったので、調査地の南西壁際と北東壁際に更にトレンチを掘削し、断面観察を実施した。(第24図) その結果、北東壁の黄灰色砂質土中より土師器高杯の完形品が1点(122)発見された。上下の堆積層より考えて、湿地帯か洪水等による堆積時に埋もれたものと思われる。

(坂口)

遺物 (第25図)

出土遺物は土師器片・須恵器片で、器種が確認でき、図示した高杯形土器(土師器完形品)が1点下層の黄灰色砂質土層より出土している。

高杯形土器122は口縁端部が極端に反外し、柱状部はゆるやかに広がり瓶部で大きく開く、外面調整は剥離のため不明であるが脚部にハケ目がかすかに残る。柱状部内側にシボリの跡が残る。法量、胎土、色調、調整、特徴等については遺物観察表に示した。(楠山)



第25図 第3地点出土遺物

ま　と　め

今回調査を実施した付近の既往の調査では、古墳時代前期の住居跡・方形周溝墓・土塁墓等が検出されているので、今回の調査においても、同様の遺構の存在を予想し、特に第2地点では、住居区域あるいは墓域を想定して、調査を実施したのであるが、いづれをも積極的に証明する遺構は発見されなかった。しかし第2地点の溝1はそれら上記の遺構と同時期のものであり、溝内より出土した土師器は一括遺物として、その共存関係を示す好資料である。これらの中には、東海系の土器である「S」字状口縁の壺が含まれており、当時の交流関係をうかがわしめるものである。なお「S」字状口縁土器は和泉においては、石津川遺跡で1点出土している。

第1地点および第3地点は、七ノ坪遺跡の北東限および北限を示すものであろう。

なお遺跡の南限および南西限であると考えられる泉大津高等学校敷地内での、府教委による現在継続中の発掘調査では、古墳時代初期およびそれ以前の水田址が発見されている。七ノ坪遺跡における住居区域・生産区域・墓域が解明されつつあり、今後の調査に期待するところ大である。

(坂口)

(参考文献)

- ① 「和泉市史」(第一巻) 和泉市史編纂委員会 1965・10

なお「和泉市史」においては、和泉市父鬼と地名がなっているが、和泉市教育委員会の灰掛 薫氏の御教示により大野町と改めた。

- ② 「大園遺跡発掘調査概要」 高石市教育委員会 1977

- ③ 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1974

- ④ 「豊中遺跡発掘調査概要Ⅱ」 泉大津市教育委員会 1978・3

- ⑤ 「和氣・和氣遺跡発掘調査報告書」 和氣遺跡調査会 1979

『和氣Ⅱ・和氣遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 和氣遺跡調査会 1981

- ⑥ 石部正志 「七ノ坪遺跡試掘調査報告」「和泉考古学」第6号 1974

- ⑦ ③と同じ

- ⑧ ⑥と同じ

- ⑨ 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 泉大津市教育委員会 1975・3

- ⑩ 「七ノ坪遺跡現地説明会資料」 大阪府教育委員会文化財保護課 1982・2

- ⑪ 七ノ坪遺跡は略称として「H I」を使用する。今回報告分の第1地点は(H I-4)で、第2地点は(H I-5)で、第3地点は(H I-6)である。なお(H I-1)は「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 泉大津市教育委員会 1975・3 の第1地点であり、(H I-2)・(H I-3)は同書第2地点・第3地点である。

⑫ 第2地点(H I-5)の遺物の変形土器を参照。

⑬ 底部だけをみて変形土器の底部と決めつけるのは問題がある。この時期鉢形土器の底部にも同じようなものがあるからであるが、便宜上変形土器に分類した。

⑭ 七ノ坪遺跡でも同タイプのものが出土。⑨と同じ

⑮ 土生遺跡出土の製塙土器を近藤利由氏は4種に区分している。『土生遺跡・第2次発掘調査概要』 岸和田遺跡調査会 1975・1
なお同概要第4章に酒井龍一氏が「土生遺跡に於ける土器の編年観と製塙土器」において考察している。

⑯ その後、酒井龍一氏が泉大津市豊中・古池遺跡出土の製塙土器を「和泉地方に於ける製塙土器(弥生時代～古墳時代前期)試表」とし、和泉地域の出土遺物と紀伊半島出土遺物とを分類して考察している。『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅤ』の第7章のV製塙土器。豊中・古池遺跡調査会 1976・3

⑰ 才原金弘 「東大阪市内出土の製塙土器」「東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度」 東大阪市遺跡保護調査会 1980・10
⑯ 『岬町遺跡群発掘調査概要——小島東遺跡・淡輪遺跡』 大阪府教育委員会 1975・3
なお同概要第1編小島東遺跡第6章に広瀬和雄氏が「古墳時代土器製塙覚書」として製塙についての考察をしている。

⑯ 『土生遺跡・第3次発掘調査概要』 岸和田遺跡調査会 1975・3
⑯ 『豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅢ』 豊中・古池遺跡調査会 1976・3
⑯ 分割成形技法は、畿内第5様式土器を特色づける技法の一つである。都出比呂志「古墳出現前夜の集団關係—淀川水系を中心に—」『考古学研究』第20巻4号 1974
⑯ ⑨と同じ

⑯ 酒井龍一「和泉に於ける「伝統的第V様式」に関する覚え書き——豊中遺跡出土遺物の整理をして——」 ⑯ の第7章。
酒井龍一「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程(認識論的作業仮説として)」
『上町遺跡発掘調査概要——和泉市上町所在——』の第6章「付載」。和泉市教育委員会 1975・3

⑯ 中西常雄「北大津の変貌——弥生時代から古墳時代へ——」 1979・8
⑯ 大參義一「S字状口縁土器考」「いちのみや考古」第13号 1967
大參義一「弥生式土器から土師器へ(東海地方西部の場合)」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第47号 1968
⑯ ⑨と同じ

⑯ 化粧土については問題点があり、どのようなものか又化粧土というものがあるのかはっきりしないが、ここでは便宜上化粧土が施されているとした。

⑯ 和泉丘陵内遺跡調査会、白石耕治氏の御教示を得た。

⑯ 「柳塚遺跡発掘調査報告」 倉吉市教育委員会 1978
⑯ ⑨と同じ

- ⑪ 「土生遺跡発掘調査概要」 岸和田市教育委員会 1976・3
- ⑫ 「轟向」 桜井市教育委員会 1976
- ⑬ 「陶邑Ⅲ 大阪文化財調査報告書」 第30輯 大阪府教育委員会 1978
- ⑭ ⑩と同じ
- ⑮ 「豊中・古池遺跡発掘調査概要 そのⅡ」 豊中・古池遺跡調査会 1974・3
- ⑯ 小林行雄「土製支脚」『考古学雑誌』第31巻第5号 1941
- ⑰ 「伊丹市史」(本編第1参考古編) 伊丹市 1971
- ⑯ なお、大橋信弥氏の「支脚形土製品の系譜、1・各遺跡における出土状況」『古代研究』 17号 元興寺文化財研究所考古学研究室 1978・冬 によると岸和田市土生遺跡や大阪市難波宮跡下層遺跡より土製支脚が出土しているとあるが、現在検討中であったり台状のものであるため、数に入れなかった。

遺物観察表

第1地点

土器

壺形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
1	12.0	(残存高) 14.4	微砂粒を多く含む。 淡茶褐色。	内外面口縁部にヘナナゲがかすかに残る。	第3トレンチ	二次的な焼成でピンク色に変色。外面上にスス付着部分あり。 焼成: やや良好 質: 軟質
2	21.0	(残存高) 13.8	微砂粒を多く含む。 乳白色。	内外面口縁部はヨコナデ。 内面側部はヘラ削り。 外面側部ははけ目がかすかに残る。	第1トレンチ	焼成: 良好 質: 軟質
3	21.3	(残存高) 6.0	微砂粒を多く含む。 淡赤褐色。	内外面かなり剥離がひどいがヨコナゲが残る。	第4トレンチ 溝	焼成: 良好 質: 軟質
4	—	(残存高) 11.3	微砂粒を多く含む。 淡灰茶色。	内外面へタ削り。	第5トレンチ 溝上面	二次的な焼成で外面片がピンク色に変色。スス付着。 焼成: やや良好 質: 軟質

壺形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
5	16.1	(残存高) 6.5	3mm程度の石英粒を含む。 1mmから2mm程度の砂粒を含む。 乳褐色。	内外面口縁部はヨコナデ。 内外側部ははけ目。 外面側部はタキ目。	第1トレンチ	焼成: 良好 質: 軟質
6	—	(残存高) 5.1	1mmから3mm程度の砂粒を含む。 暗茶色。	内部は剥離のため調整不明。 外面はタタキ目。	第3トレンチ 遺構上面	外面上にスス付着部分あり。 焼成: 良好 質: 軟質
7	—	(残存高) 3.1	2mm程度の石英粒と微砂粒を含む。 茶褐色。	内部はヘラ削り。 外面はタタキ目。	第5トレンチ 遺構面	焼成: 良好 質: 軟質
8	—	(残存高) 3.4	1mmから3mm程度の砂粒を多く含む。 乳褐色。	内部はヘラ削り。 外面はタタキ目。	第5トレンチ 遺構面	焼成: 良好 質: 軟質

高杯形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
9	17.2	(残存高) 5.4	微砂粒を少し含む。 淡赤茶色。	剥離のため調整不明。	第2トレンチ	焼成: 良好 質: 軟質

鉢形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
10	13.4	5.4	1mmから3mm程度の石英粒・砂粒を含む。乳褐色。	軽離のため調整不明。	第5トレンチ遺構上面	(台付き鉢) 焼成:良好 質:軟質
11	15.6	7.3	1mmから2mm程度の砂粒を多く含む。乳褐色。	内面は調整不明。 外面はタタキ目が残る。	第5トレンチ 青灰色砂質土層	底部が平底になり、しっかりと作られている。 焼成:良好 質:軟質

小型丸底土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
12	—	(残存高) 4.5	精良な粘土を使用。茶褐色。	内面はヨコナメ。 外面はヘラ削り。	第3トレンチ	内側底部に朱を入れたあとが残っている。 焼成:良好 質:軟質

製塩土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
13	(脚幅径) 5.1	(残存高) 6.3	精良な粘土を使用。茶褐色。	外面はタタキ目。	第3トレンチ遺構 上面	焼成:やや良 質:軟質
14	—	(残存高) 6.0	精良な粘土を使用しているが1mm程度の砂粒を少し含む。乳褐色。	外面はタタキ目。	第3トレンチ遺構 上面	焼成:やや良 質:軟質
15	(脚幅径) 4.3	(残存高) 3.9	1mmから2mm程度の灰褐色砂粒・黒色砂粒を含む。赤褐色。	外面はヘラ削り。	第2トレンチ	二次的な焼成のために ピンク色に変色し、もろくなっている。 焼成:やや良 質:軟質
16	(脚幅径) 6.0	(残存高) 3.2	精良な粘土を使用。茶褐色。	軽離のため調整不明。	第3トレンチ遺構 上面	焼成:やや良 質:軟質

手培り形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
17	—	(残存高) 8.5	精良粘土使用。乳色。	軽離のため調整不明。	第5トレンチ	腹部に下向きの一束の凸帯が付いている。しっかりと作られた平底の底部。 焼成:良好 質:軟質

砾石

No.	法 量(cm)	材質及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
18	(最大長) 28.2 (最大高) 10.4	砂岩。 乳白色。	使用面は2面あり数条の浅い溝が走る。使用面は摩滅がはげしい。	第1トレンチ	質:軟質で目が粗い。

第2地点

土器器

壺形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
19	12.1	20.2	微砂粒。1mm程度の砂粒を含む。 茶白色。	内面口縁部はヘラナデ、胴部はヘラ削り。 外面口縁部から肩部、腹部にかけてはヘラナデ、腹部から底部はヘラ削り。	溝-1 グリッド1 上層	ひも巻き上げ法。腹部に二ヶ所の接合あり。 外面2分の1程度二次的な焼成のためススが付着したり、赤っぽく変色している。 焼成：やや良 質：軟質
20	12.9	(残存高) 11.9	1mmから2mm程度の砂粒を含む。 乳白色。	内外面口縁部はヘラナデ、内外面胴部は剥離のため調整不明。	溝-1 グリッド20 上層	口縁部に接合あり。 焼成：やや良 質：軟質
21	—	(残存高) 10.1	1mmから1.5mm程度の石英粒を多く含む。 内面：茶白色。 外面：乳白色。	内外面剥離のため調整不明。	溝-1 グリッド20 下層・灰色粘土砂	口縁部に二ヶ所、腹部に二ヶ所接合あり。 外面は二次的焼成のため乳白色に変色している。 焼成：不良 質：軟質
22	12.2	(残存高) 14.4	1mm程度の砂粒を含む。 乳茶色。	内面は細いはけ目。 外面はヘラ削り。	溝-1 グリッド20 上層	二次的な焼成で赤黒くなっている。肩部に接合あり。 焼成：やや良 質：軟質
23	18.0	(残存高) 6.5	2mmから5mm程度の石英粒。1mmから2mm程度の砂粒を多く含む。 乳白色。	内外面はヨコナデ。	溝-1 グリッド20 上層	焼成：良好 質：軟質
24	17.8	(残存高) 16.0	1mm程度の砂粒を含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、胴部はヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、胴部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド1 上層	焼成：良好 質：軟質
25	27.1	(残存高) 11.9	1mm程度の砂粒、微砂粒を多く含む。 乳白色。	内面は剥離のため調整不明。 口縁部上部はヨコナデ、その他は大小のタテはけ目。	溝-1 グリッド20 上層	内面口縁部に13cmほどのススの付着部あり。 焼成：良好 質：軟質
25'	—	(残存高) 17.4	内面に3mm程度の石英粒を多く含む。微石英粒を多く含む。 乳白色。	内面は指圧痕のうえヨコヘラ削り。 外面はタテはけ目。	溝-1 グリッド20 上層	内面にスス付着。外面底部に13cmほどのススの付着部あり。 焼成：良好 質：軟質
26	21.6	(残存高) 26.5	数ヶ所に3mm程度の石英粒あり。 (口縁部) 赤褐色。 (胴部) 乳白色。	内面口縁部は剥離のため調整不明、胴部は大小の指圧痕あり。 外面口縁部は剥離のため調整不明、胴部はタテはけ目。	溝-1 グリッド10 上層	内面胴部4分の1にスス付着あり。 焼成：良好 質：軟質
27	22.3	(残存高) 9.8	微砂粒を含む。 茶白色。	内面は剥離のため調整不明。 外面はヨコナデ、胴部にタテはけ目が残る。	溝-1 グリッド10 上層	(二重口縁) 焼成：良好 質：軟質

No.	口径(cm)	高さ(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
28	14.9	(残存高) 23.7	微砂粒を含む。 茶白色。	内面口縁部は斜めくし痕のうえヨコナギ、胴部は指圧痕、腹部にくしによる調整がみられる。 外面口縁部はヨコナギ、胴部ははけ目、胴部は剥離のため調整不明。	溝-1 グリッド20 上層	口縁部にまばらではあるが鉄分付着、胴部内面の三分の二程度に鉄分の付着、腹部外面にまばらにわずかの鉄分付着。 (二重口縁) 焼成：良好 質：軟質
29	—	(残存高) 11.8	微砂粒を多く含む。赤 色粒を少し含む。1mm 程度の石英粒をわずか に含む。 暗茶白色。	内面口縁部から頭部はヨコナギ、 胴部はヨコヘラ削き。 外面は口縁部から肩部にかけてヨ コナギ、胴部ははけ目。	溝-1 グリッド21 下層・灰白色粘土	(二重口縁) 焼成：良好 質：軟質
30	22.3	(残存高) 8.2	0.5mmから1mm程度の砂 粒を含む。 乳白色。	内外面はヨコナギ。	溝-1 グリッド21 下層・灰白色粘土	口縁部の内外面に2cm の黒斑部あり。 (二重口縁) 焼成：良好 質：軟質
31	12.7	15.3	微砂粒を多く含む。 茶白色。	内面口縁部は細いへラ削き。胴部 は入念なへラ削りのため凸凹が少 ない。 外面は細いへラ削き。腹部から底 部にかけてはへラ削りのうえ細い へラ削き。	溝-1 グリッド10 上層	底部に直径2.3cmの穿 孔が内側からあけられ ている。 ひも巻き上げ法。 (丸底蓋) 焼成：良好 質：軟質
32	6.9	(残存高) 4.1	微砂粒を少し含む。数 個の1mm程度の砂粒を 含む。 淡茶色。	内面はヨコナギ。 外面口縁部はヨコナギ、胴部はヨ コヘラナギ。	溝-1 グリッド10 上層	(小型蓋) 焼成：良好 質：軟質
33	—	(残存高) 11.2	2mmから3mm程度の白 砂粒を少し含む。 乳茶色。	内面は指圧痕のうえヨコヘラナギ。 外面胴部はヘラ削り、底部はタテ ヘラ削き。	溝-1 グリッド20 上層	(平底蓋底部) 焼成：良好 質：軟質
34	—	(残存高) 3.0	1mm程度の砂粒を多く 含む。 乳茶色。	内外面は剥離のため調整不明。	溝-1 バンク2上 層	(平底蓋底部) 内面底部に黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質

変形土器

No.	口径(cm)	高さ(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
35	13.5	21.4	微砂粒を多く含む。 茶白色。	内面はヨコヘラ。 外面口縁部はヨコナギ、胴部はタ タキ目。	溝-1 東岸上グリ ッド10 黄灰色砂質土	平底。 肩部と腹部に接合あり。 焼成：良好 質：軟質
36	18.9	(残存高) 20.4	0.5mmから2mm程度の砂 粒を多く含む。 赤褐色。	内面は剥離のため調整不明。 外面胴部はタタキ目。 腹部から下はタタキ目のうえから ヘラナギ。	溝-1 東岸上グリ ッド10 黄灰色砂質土	外面胴部に幅・横14cm ほどの黒斑部あり。 タタキ目は6本で約3 cm巾である。 焼成：良好 質：軟質
37	15.8	(残存高) 17.8	1mm程度の石英粒を多 く含む。微砂粒を含む。 乳茶白色。	内面口縁部は斜めはけ口。胴部は 細いはけ目。 外面口縁部ははけ目のうえヨコナ ギ、胴部はタタキ目。	溝-1 東岸上グリ ッド10 黄灰色砂質土	口縁部に接合あり。 外面胴部に黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質

No.	口徑(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	測 索	出土場所(層)	備 考
38	11.7	14.1	微砂粒を少し含む。 乳茶色。	内面口縁部ははけ目、肩部はヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、肩部ははけ目。腹部から底部にかけてはけ目のうえハラナデ。	溝-2 グリッド21 上層	口縁部と腹部に接合あり。 焼成：良好 質：軟質
39	12.2	(残存高) 6.9	1mmから2mm程度の砂粒を含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、肩部はタチはけ目、腹部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド20 上層	内面に鉄分の付着あり。 外側に黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
40	11.7	(残存高) 5.2	1mm程度の石英粒を数ヶ所に含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコはけ目、肩部はヨコヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、肩部はタチはけ目。	溝-1 グリッド10 上層	口縁部に接合あり。 焼成：良好 質：軟質
41	12.3	(残存高) 5.4	微砂粒を多く含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコはけ目、肩部はヘラ削り。 外面はヨコナデ。	溝-1 グリッド10 上層	口縁部に接合あり。 焼成：良好 質：軟質
42	12.1	17.0	1mm程度の砂粒を多く含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り、肩部は指圧痕。 外面口縁部はヨコナデ、肩部はタチはけ目。腹部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	外側に焼成痕(黒斑部)あり。 焼成：良好 質：軟質
43	12.9	(残存高) 10.2	1mm程度の砂粒を含む。	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、肩部はタチはけ目、腹部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	外側に黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
44	14.9	(残存高) 10.8	1mm程度の砂粒を含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り、腹部は指圧痕。 外面口縁部はヨコナデ、肩部はタチはけ目、腹部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	焼成：良好 質：軟質
45	13.7	(残存高) 8.5	微砂粒を多く含む。 茶褐色。	内面は剥離のため調整の残りが悪いかわすかにはけ目が残る。 外面は剥離のため調査不明。	溝-1 グリッド10 上層	焼成：やや良好 質：軟質
46	13.3	(残存高) 8.8	1mm程度の砂粒を多く含む。1.5mm程度の石英粒を2-3ヶ所に含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、肩部は指圧痕。肩部は指圧痕のうえヘラ削り。 外面は口縁から肩部にかけてヨコナデ、肩部は特にタチはけ目のうえヨコナデが踏まれているのでところどころ溶えている。腹部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	外面肩部に縦3.5cm、横4.5cmの黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
47	13.8	(残存高) 9.6	1mm程度の砂粒を含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、肩部はタチはけ目。腹部はヨコハケ目が焼成にも重なっている。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	焼成：良好 質：軟質
48	16.1	(残存高) 9.6	微砂粒を多く含む。赤 色粒を含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り。 外面口縁部はヨコナデ、肩部ははけ目。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	外面口縁部に1cm巾の 黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
49	15.9	(残存高) 11.5	1mm程度の砂粒を数多く含む。 乳茶色	内面口縁部はヨコナデ、肩部はヘラ削り。 外面口縁部から肩部はヨコナデ、腹部はヨコはけ目。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	外面肩部に縦10cm巾の 黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質

No.	口径(cm)	高さ(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
50	14.1	(残存高) 7.5	1mm程度の石英粒と微 砂粒を少し含む。 乳茶色。	内面口縁部はヨコナデ、胴部は指 圧痕のうえはけ目。 外底口縁部はヨコナデ、胴部はは け目。	溝-1 グリッド20 上層	外面胴部縦4cm、横8 cmの黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
51	17.0	(残存高) 4.9	微砂粒を多く含む。1 mm程度の石英を含む。 乳茶色。	内面口縁部は、はけ目のうえヨコ ナデ、胴部はヘラ削り。 外底口縁部はヨコナデ、胴部はタ テはけ目。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	口縁部に接合あり。 焼成：良好 質：軟質
52	—	(残存高) 11.3	微砂粒を少し含む。 乳茶色。	内面胴部はヘラ削り。 外曲胴部はタテはけ目。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	外面に焼痕あり。 焼成：良好 質：軟質
53	—	(残存高) 12.6	微砂粒を多く含む。 白茶色。	内面はヘラ削り。 外曲ははけ目。	溝-1 グリッド11 上層	焼成：良好 質：軟質
54	15.6	19.4	4mm程度と2mm程度の 石英粒を含む。 乳褐色。	内面口縁部はヨコナデ、底部から 底部にかけては指圧痕のうえはけ 目が残されていると思うがはけ目 の残りが多い。底部は挽正腹のう えヨコヘラナデ。 外底口縁部はヨコナデ、胴部はタ テはけ目。	溝-1 グリッド11 上層	外面底部に黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
55	13.3	22.2	0.5mmから1mm程度の石 英粒あり、微砂粒を多 く含む。 (河内系) 茶褐色。	内面口縁部はヨコナデ、胴部は指 圧痕、腹部は指圧痕のうえヘラ削 り。 外底口縁部はヨコナデ、胴部はタ テはけ目、底部ははけ目のうえヨ コナデ。	溝-1 グリッド21 上層	外面胴部に縦10cm、横 5cmと縦5cm、横5cm の黒斑部あり。 焼成：良好 質：軟質
56	12.9	(残存高) 11.3	1mm程度の石英粒を含 む。 (河内系) 暗茶色。	内面口縁部はヨコナデ、首部は指 圧痕、胴部はヘラ削りのうえ指で こすった痕が残る。 外底は口縁部ははけ目のうえヨコ ナデ。胴部はタテはけ目。	溝-1 グリッド10 上層	内側穿好あり。 直径8mm。 焼成：良好 質：軟質
57	—	(残存高) 22.2	7mm程度の石英粒を三 ヶ所に含む。3mm程度 の石英粒を数ヶ所に含 む。1mmから2mm程度 の砂粒を多く含む。 (河内系) 乳茶色	内面肩部は指圧痕のうえヘラ削り。 胴部はヘラ削り。 外底はタテはけ目。	溝-1 グリッド20 下層・灰色粘砂土	肩部に縦1.5cm、横0.6 cmでばね形の穿孔 が内側からあいている。 内面にススの付着あり。 外底底部に5cm巾のス スの付着あり。 焼成：良好 質：軟質
58	12.5	(残存高) 7.6	2mm程度の石英粒を數 ヶ所に含む。 乳茶色。	内面口縁部はヘラナデ、胴部はヘ ラ押し、胴部はヘラナデ。 外部胴部はタテキ日。	溝-1 グリッド20 上層	焼成：良好 質：軟質
59	12.6	(残存高) 6.6	2mm程度の石英粒を含 む。微砂粒を含む。 茶褐色。	内面肩部はヘラ押し、胴部はヘラ ナデ。 外底は細いはけ目。	溝-1 グリッド20 上層	(小型窯) 焼成：良好 質：軟質
60	14.3	(残存高) 7.0	0.5mm程度の砂粒を含 む。 (東海系) 茶白色。	内面口縁部はヨコナデ、胴部は剥 離のため調整不明。 外底口縁部はヨコナデ、肩部は板 状のものかヘラの描き目。	溝-1 グリッド21 上層	S字状口縁 焼成：良好 質：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
61	17.2	(残存高) 7.1	微砂粒を多く含む。 黒灰色	内面口縁部はヘラ削り。 内面口縁部外面は剥離のため調整不規。	溝-1 グリッド20 上層	焼成: 良好 質: 軟質
62	14.3	(残存高) 4.7	微砂粒を多く含む。 2mmから3mm程度の石英粒を少し含む。 暗茶白色。	内面口縁部は剥離のために調整不明。 肩部は指ナデ。 外面部口縁部はヨコナダ、肩部はタテはけ目。	溝-1 バンク3 上層	焼成: 良好 質: 軟質
63	17.1	(残存高) 5.3	1mm程度の砂粒を多く含む。 3mm程度の石英粒を含む。 茶色。	内面と外面部口縁部は剥離のために調整不明。 外面部口縁部はタタキ目。	包含層	焼成: 良好 質: 軟質

高杯形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
64	16.2 (脚幅径) 11.6	(器高) 14.8 (杯部高) 5.7 (脚部高) 9.1	0.1mmから0.2mm程度の 微砂粒を含む。 赤茶色。	杯部分内面はヘラ削きのうえにはけ日。中心部はヘラ削き。外面は口縁部はヨコナダ。その他のははけ目。 脚部内面柱状部にしづりの跡が残る。底部はヘラナダ。外周柱状部ははけ日のうえヨコヘラ削き。	溝-1 下層・灰褐色 粘砂土	焼成: 良好 質: 軟質
65	16.5	(杯部高) 6.0	0.2mmから1mm程度の砂粒を多く含む。 赤褐色。	杯部は内面部外面は剥離のために調整不明。 柱状部は外面ははけ日のうえヘラ削き。内面はヘラ削り。	溝-1 上層	焼成: 良好 質: 軟質
66	16.6	(杯部高) 6.5	1mmから2mmの石英粒・砂粒を多く含む。 茶褐色。	内面はヨコナダのうえ放射状ヘラ削き。外面口縁ヨコナダ、全体に放射状ヘラ削きのうえはけ日。 杯部の接合部分、粘土で上から塞ぎ中心から外へ指でなでている。	溝-1 バンク2 上層	外面口縁部に長さ3.5cm、巾1.5mmほどのスス付着部分あり。 焼成: 良好 質: 軟質
67	19.0	(杯部高) 8.0	1mmから2mmの砂粒を多く含む。 乳褐色	内外面は剥離のために調整不明。 杯部の接合部分、粘土で上から塞ぎ中心から外へ指でなでている。	溝-1 グリッド20 上層	焼成: 良好 質: 軟質
68	14.7	(杯部高) 4.8	微砂粒を多く含む。 乳白色。	内面ははけ日のうえヨコヘラナダのためににはけ日がかすかに残る。 外面は細いヨコヘラ削き。 杯部の接合部分、粘土で上から塞ぎ中心から外へ指でなでている。	溝-1 グリッド1 中層・暗茶色土層	焼成: 良好 質: 軟質
69	17.8	(杯部高) 5.5.8	1mm程度の石英粒を含む。 微砂粒を多く含む。 褐色。	内面中心部は放射状ヘラ削き。その他のは剥離のために調整不明。 外面は剥離のためにやや残りが悪いが全面にヨコヘラ削き。 杯部の接合部分、粘土で上から塞ぎ中心から外へ指でなでている。	溝-1 グリッド1 中層・暗茶色土層	焼成: やや不良 質: 軟質
70	16.0	(杯部高) 6.5	1mmから2mm程度の石英粒を含む。 乳褐色。	内外面は剥離のために調整不明。 杯部の接合部分、粘土で上から塞ぎ中心から外へ指でなでている。	溝-1 グリッド1 中層・暗茶色土層	焼成: 良好 質: 軟質
71	15.0	(杯部高) 4.5	1mm程度の砂粒を含む。 乳褐色。	内面中心部は放射状ヘラ削き。内面口縁部はヨコヘラ削き。 外面ヘラ削き。	溝-1 グリッド1 下層・灰褐色粘砂土	外面口縁部に巾2cmほどのスス付着部分あり。 焼成: 良好 質: 軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
72	14.8	(杯部高) —	微砂粒をほんの少し含む。 茶白色。	内外面は剥離のために残りが悪い が内面口縁にヨコヘラ廢きらしき ものがかすかに残る。	溝-1 上層	焼成: 良好 質: 軟質
73	— (脚部径) 11.0	(脚部高) 8.1	0.5mmから1mmの微砂 粒を含む。 乳白色。	内面柱状部上部にしばりの跡が残 る。柱状部縁部はヘラ削り。 外面柱状部はヘラ廢き、中部はヘ ラナデ、縁部はけ目。	溝-1 グリッド20 上層	脚部の接合部分は上から下に指でなでている。 焼成: 良好 質: 軟質
74	— (脚部径) 9.7	(脚部高) 5.0	0.5mm程度の砂粒をわ ざかに含む。 赤茶色。	内面柱状部はヘラ削り。上部はヘ ラ削りがとどいていないのでしば りの跡がはっきり残る。 縁部はヘラナデ。 外面はヨコヘラ廢き。	溝-1 上層	焼成: 良好 質: 軟質
75	—	(脚部高) —	1mm程度の砂粒を少し 含む。 乳褐色。	内面柱状部上部しばりの跡が残る。 縁部はタテヘラ削り。 外面柱状部はタテはけ目、柱状部 下部はヨコヘラ廢き。縁部は細い け目がかすかに残る。	溝-1 上層	焼成: 良好 質: 軟質
76	—	(脚部高) —	微砂粒を含む。 乳茶色。	内面柱状部上部しばりの跡が残る。 柱状部はヘラ削り。 外側は剥離のために調整不明。	溝-1 上層	焼成: 良好 質: 軟質

鉢形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
77	13.5	4.6	2mm程度の石英粒を含む。 微砂粒を含む。 乳茶色。	内面は剥離のため調整不明である が、底部に指圧痕が残る。 外面口縁部はヨコナデ、底部はヘ ラ削り。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	焼成: やや不良 質: 軟質
78	13.5	4.4	4mmから6mm程度の石 英粒を含む。0.5mmから 1mm程度の砂粒を含む。 赤茶色を含む。 赤茶色。	内面はヨコナデのうえ放射状のヘ ラ廢き。 外面口縁部はヨコナデ、底部はヘ ラ削り。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	焼成: 良好 質: 軟質
79	13.3	4.6	2mm程度の石英粒を含 む。微砂粒を含む。 茶褐色。	内面はヨコはけ目。 外側はタキ目、底部はヘラ削り。	溝-2 グリッド21 中層・黃灰色粘砂 上層	焼成: 良好 質: 軟質
80	14.2	7.0	微砂粒を多く含む。 灰茶色。	内面口縁部はヨコナデ、底部は指 圧痕。 外面口縁部はヨコナデ、胴部から 底部はタキ目がかすかに残る。 タキ目のうえを指でナデしている ため。	溝-1 グリッド10 上層	外側部に黒灰皮、縦 3cm、幅4cmの格円状 のもの。 焼成: 良好 質: 軟質
—	11.1	(残存高) 2.8	微砂粒を多く含む。 乳茶色。	内面はヨコナデ。 外側は剥離のため調整不明。	遺構上面	焼成: やや良 質: 軟質
82	13.0	7.9	1mmから2mm程度の砂 粒を含む。2.5mm程度の 石英粒を数個含む。 乳褐色。	内面は剥離のために調整不明。 外面杯部はけ目、台は剥離のた めに調整不明。	溝-1 グリッド11 下層・灰色粘砂土	(脚付き鉢) 脚部に直径5cmほどの スヌの付着あり。 焼成: 良好 質: 軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
83	12.7	6.2	微砂粒を多く含む。茶白色。	内面口縁部はヨコナダ。脚部は手押しのうえナダ。外面口縁部はココナダ。脚部ははけ目。	溝-1 グリッド1 上層	(二重口縁鉢) 焼成: 良好 質: 軟質
84	14.5	4.4	微砂粒を多く含む。暗灰色。	内面は剥離のために測定不明。外面口縁部はヨコナダ。脚部ははけ目。	溝-1 グリッド20 上層	(二重口縁鉢) 焼成: 良好 質: 軟質
85	12.8	4.2	1mm程度の砂粒を含む。乳褐色。	内外面は剥離のために測定不明。	溝-1 グリッド1 上層	(二重口縁鉢) 焼成: 良好 質: 軟質
86	14.2	3.6	微砂粒を少し含む。褐色。	内外面は剥離のために測定不明。	溝-1 グリッド1 中層・暗茶色土層	(二重口縁鉢) 外面に黒斑部あり。 焼成: 良好 質: 軟質
87	15.1	(残存高) 4.2	微砂粒をごく少し含む。乳茶色	内面は細いヨコヘラ磨き。外面は脚部はヘラナダのうえ細いヨコヘラ磨き。口縁部はヨコヘラ磨き。	溝-1 グリッド20 上層	(小型鉢) 焼成: 良好 質: 軟質
88	—	(残存高) 4.6	微砂粒を少し含む。乳茶色。	内外面はヘラ磨き。	溝-1 グリッド10 下層・灰色粘砂土	(小型鉢) 外面に化粧土が残っている。 焼成: 良好 質: 軟質
89	30.8	(残存高) 17.1	微砂粒・1mm程度の砂粒を多く含む。茶白色。	内面口縁部はヨコナダ、脚部は指圧痕のうえヘラ削り。外面口縁部はヨコナダ、脚部ははけ目。	溝-1 グリッド1 上層	(大型鉢) 外面のはけ目は巾1.2cm、本数8本。 焼成: 良好 質: 軟質

低脚杯形土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
90	11.9	5.5	微砂粒を多く含む。乳茶色。	内面はヨコナダ。外面杯部ははけ目のうえヨコヘラ磨き。脚部はヨコナダ。	溝-1 グリッド10 上層	焼成: 良好 質: 軟質

器台形土器

No.	LJ径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
91	(台幅径) 11.9	(台部高) 4.6	0.2mmから0.5mmの砂粒を含む。茶白色。	内面脚部・受部はヘラ磨き、屈曲部はヘラナダ、脚部はココナダ。外面杯部はヘラ磨き。脚部はたてはけ目のヘラ磨き。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	内面の4分の1にはススが付着。 焼成: 良好 質: 軟質
92	(台幅径) 12.2	(台部高) 4.3	0.5mm程度の砂粒を多く含む。茶白色。	内面は剥離のため測定不明であるが指圧痕が残る。外面は剥離のため調整不明。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	焼成: 良好 質: 軟質
93	(台幅径) 13.0	(台部高) 5.2	微砂粒を少し含む。茶白色。	内面は剥離のため測定不明。外面は底部はヨコナダ。他はヘラ磨き。	溝-1 グリッド21 下層・灰色粘砂土	焼成: 良好 質: 軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
94	(台幅径) 11.7	(台部高) 5.3	微砂粒を少し含む。 乳茶色。	内面は指圧痕のうえタテはけ目。 外面はヘラ削き。	溝-1 グリッド20 下層・灰褐色砂土	焼成：良好 質：軟質
95	(台幅径) 11.9	(台部高) 4.8	微砂粒を少し含む。 乳茶色。	内面は指圧痕のうえタテはけ目。 外面はヘラ削き。	溝-1 グリッド11 上層	焼成：良好 質：軟質
96	(台幅径) 13.5	(台部高) 6.5	1mm程度の砂粒を含む。 茶褐色。	内面はヨコはけ目。 外面はヘラ削き。	溝-1 グリッド20 上層	焼成：良好 質：軟質
97	(台幅径) 11.0	(台部高) 3.6	微砂粒を含む。 内面：乳褐色 外面：乳茶色	内面側部接合部は指圧痕あり、そ の他はけ目。 外面はヘラ削き。	溝-1 グリッド11 上層	内面に鉄分の付着あり。 焼成：良好 質：軟質

小型丸底土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	調 整	出土場所(層)	備 考
98	9.1	7.0	微砂粒を少し含むが精 良な粘土を使用。 乳褐色。	内面はヨコナデ。 外面口縁部は細いヘラ削き。胴部 はあらいヘラ削き。底部はヘラ削 り。	溝-1 下層・灰色 粘土	焼成：良好 質：軟質
99	12.2	—	1mmの石英粒を少し含 むが精良な粘土を使用。 乳白色。	内面は剥離のため調整不明。 外面口縁部はヨコナデ、胴部はヘ ラ削き。	溝-1 グリッド20	L1縁部外面縦3cm、横 2.5cm、同内面縦3.5cm、 横3cmの黒斑点あり。 焼成：良好 質：軟質
100	11.3	8.1	微砂粒を少し含むが精 良な粘土を使用。 茶褐色。	内面は剥離のため調整不明。 外面口縁部はヨコヘラ削き。胴部 はヘラナデ。	溝-1 グリッド20	焼成：良好 質：軟質
101	8.7	8.0	微砂粒を多く含む。 乳褐色。	内面口縁部はヨコヘラ削き。胴部 はヨコナデ、底部は剥離のため調 整不明。 外面口縁部はヨコヘラ削き、胴部 はヘラ削り。	溝-1 グリッド1	焼成：良好 質：軟質
102	10.0	—	微砂粒を少し含むが精 良な粘土を使用。 乳褐色。	内面は剥離のため調整不明。 外面口縁部はヨコヘラ削き、胴部 は剥離のため調整不明。	溝-1 グリッド1 下層・灰褐色粘土	焼成：良好 質：軟質
103	11.5	—	微砂粒を多く含む。 茶色。	内外面は剥離のため調整不明。	溝-1 上層	焼成：良好 質：軟質
104	11.0	6.5	微砂粒を少し含むが精 良な粘土を使用。 茶色。	内面口縁部はヨコはけ目。胴部は ヨコナデ。 外面口縁部はヨコナデ、胴部はあ らいヨコヘラ削き。	溝-1 グリッド11 上層	焼成：良好 質：軟質
105	9.7	8.1	0.5mmから2mm程度の砂 粒を抜け所に含む。2 mm程度の石英粒を少し 含む。 乳茶色。	内面は剥離のため調整不明。 外面口縁部から肩部はヨコナデ、 腹部はヘラナデ。腹部から底部に かけては剥離のため調整不明。	溝-2 グリッド21 中層・黄褐色粘沙 土層	焼成：良好 質：軟質

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	測 算	出土場所(層)	備 考
106	9.8	(残存高) 6.1	微砂粒を多く含む。 乳白色。	内外面は剥離のため調整不明。	調-1 グリッド11 上層	焼成: 良好 質: 軟質
107	7.4	9.1	0.2mmから1mm程度の砂粒を含む。 乳白色。	内面口縁部はナデ削りから腹部にかけてはヘラ削りのうえナデ、腹部から底部にかけては指圧痕のうえナデ。 外面はナデ。	調-2 グリッド21 上層	脚部外面に0.5cm巾で4cmほど鉄粒が付着している。底部は平になっている。 焼成: 良好 質: 軟質
108	14.4	(残存高) 4.4	2mm程度の砂粒を含む。 赤茶色。	内外面口縁部はヨコナデ、他はヨコヘラ削き。 内外面とも繊密なヘラ磨きが施されている。表面は剥離のため磨きの残りが悪い。	調-1 グリッド21 下層・灰色粘土	内外面にボツボツとまばらに鉄分付着。 焼成: 良好 質: 軟質

製塙土器

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び色調	測 算	出土場所(層)	備 考
109	(脚幅径) 3.1	(残存高) 3.8	微砂粒を多く含む。 淡赤茶色。	内面杯部・脚部はヘラ削り。 外面部杯部はタタキ目、脚部はヘラ削り。	調-1 グリッド1 中層・暗茶色土層	外面は二次的焼成でピンクばく変色している。 焼成: 良好 質: 軟質
110	(脚幅径) 5.2	(残存高) 5.3	1mm程度の砂粒を多く含む。3cmほどの石英粒をところどころに含む。 乳白色。	内面杯部はヘラ押し、脚部はヘラ削り。 外面はタタキ目。	調-1 グリッド10 上層	外面杯部に接目あり。 焼成: 良好 質: 軟質
111	(脚幅径) 6.1	(残存高) 5.2	3mm程度の白色砂粒・ 茶色砂粒を含む。微砂粒を多く含む。 乳茶色。	内面杯部脚部はヘラ削り。 外面はヘラ押し。	包含層	外面脚部に2.5cm巾のススの付着あり。 内面杯部は二次的焼成でピンクばく変色している。 焼成: 良好 質: 軟質

その他の遺物

No.	器 形	法量(cm)	胎土及び色調	測 算	出土場所(層)	備 考
112	高 筋 (須恵器)	(脚幅径) 9.1 (残存高) 4.1	1mmから1.5mm程度の白色砂粒を多く含む。 0.5mm程度の砂粒を多く含む。 暗灰色。	回転ナデ。	包含層	透し孔は等間隔に3ヶ所穿けられている。 焼成: 良好 質: 硬質
113	籽身(受部片) (須恵器)	(受部径) 15.3 (反転復元)	微砂粒を少し含む。 淡灰色。	回転ヨコナデ。	遺構上面	焼成: 良好 質: 硬質
114	(青 磁)	---	乳青色。	内面は釉が施されている。外面は無釉である。 底部は造り出し高台。	遺構上面	小皿底部 質: 硬質
115	(青 磁)	—	乳青色。	内面は釉が施されている。外面は無釉である。 底部は平底。	包含層	質: 硬質

No.	器形	法徳(cm)	胎土及び色調	調整	出土場所(層)	備考
116	(青磁)	—	乳白色。	—	遺構上面	質:硬質
117	小皿 (白磁)	—	灰白色。	気泡の多い釉が施されている。 器体は薄く、口縁端部は大きくそり返る。	遺構上面	小皿口縁片 質:硬質
118	(白磁)	—	灰白色。	—	遺構上面	質:硬質
119	土製支脚 (土師質)	(最大高) 7.9	0.5mm程度の砂粒を多く含む。 2mmから3mm程度の砂粒を少し含む。 乳白色。	—	溝-1 グリット1 上層	鳥糞子状の土製支脚。 焼成:良好 質:軟質
120	石器	(横最大) 3.4 (縦最大) 5.6 (最大厚) 1.7	サヌカイト。 灰黒色。	一邊の両面を人為的に調整している。	黄灰色砂質土	不定形刃器の可能性がある。 質:硬質
121	胴部片 (土師質)	—	微砂粒を含む。 暗茶色。	外面は細いハケ目であり、交わるよう ^に 放射状のヘラガキ文が残る。 (放射状ヘラガキ立様)	溝-1 グリット21 上層	焼成:良好 質:軟質

第3地点

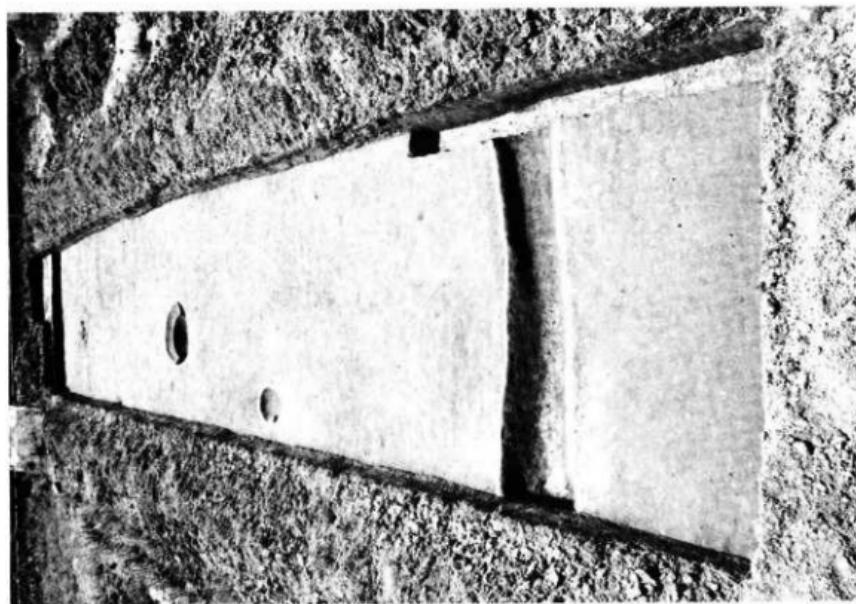
土師器

高杯形土器

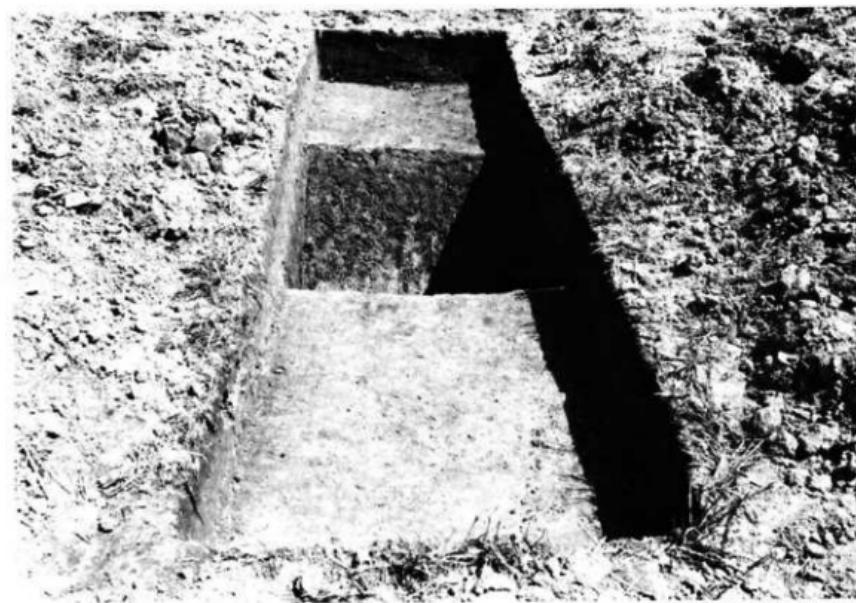
No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土及び調整	調整	出土場所(層)	備考
122	15.7 (脚部径) 11.9	13.6	1mmから2mm程度の白色と灰白色の砂粒を含む。 3mm程度の灰色粒を含む。 茶褐色。	削離のため調整不明。	北トレンチ内 黄灰色粘土下 青灰色砂質土層	焼成:良好 質:軟質

(楠山)

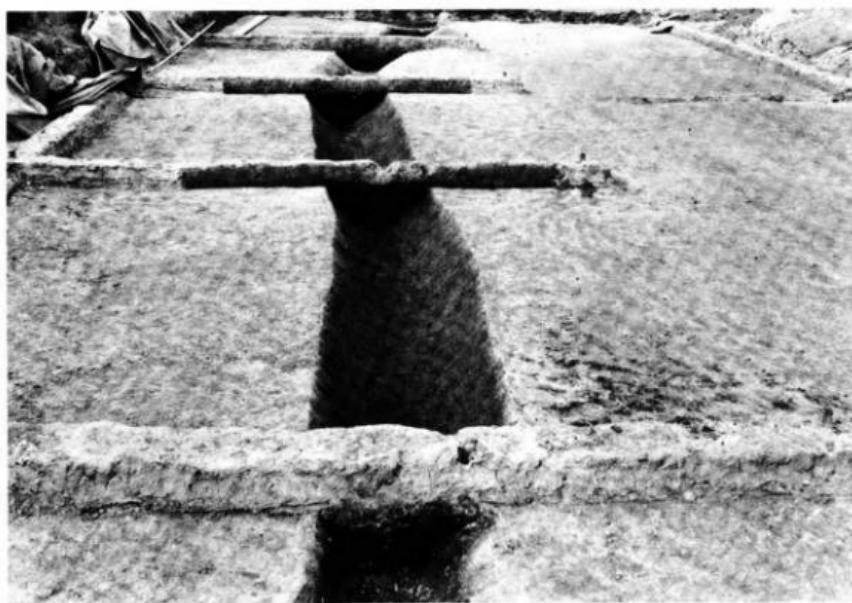
図 版



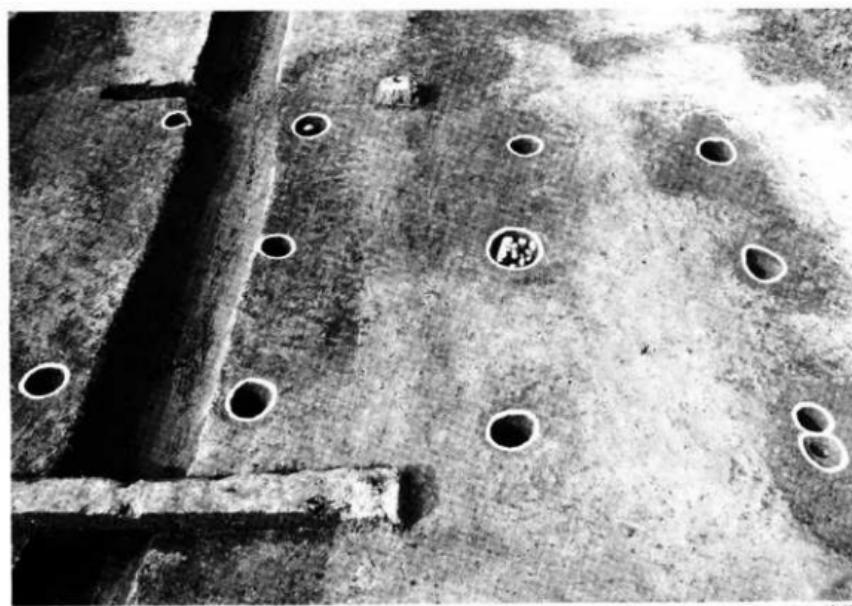
第1地点 第3トレンチ



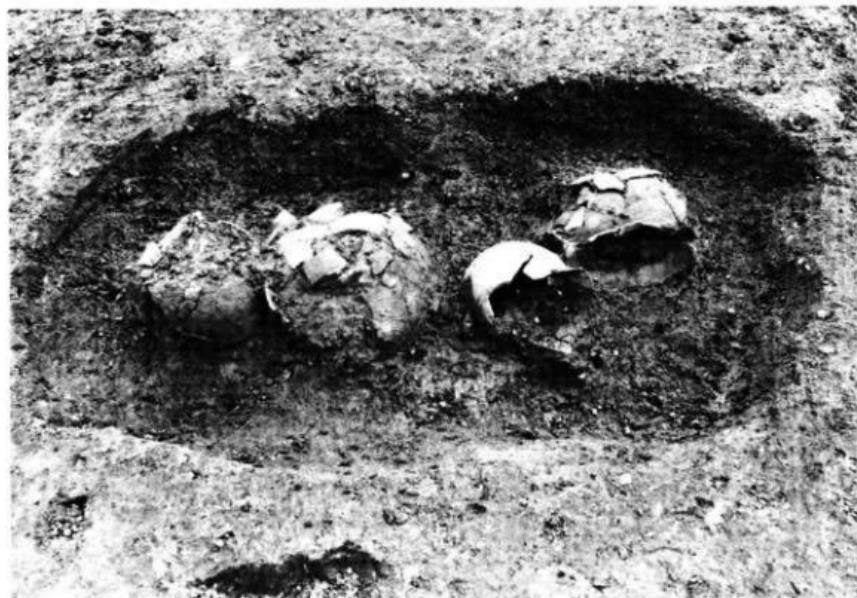
第1地点 第5トレンチ



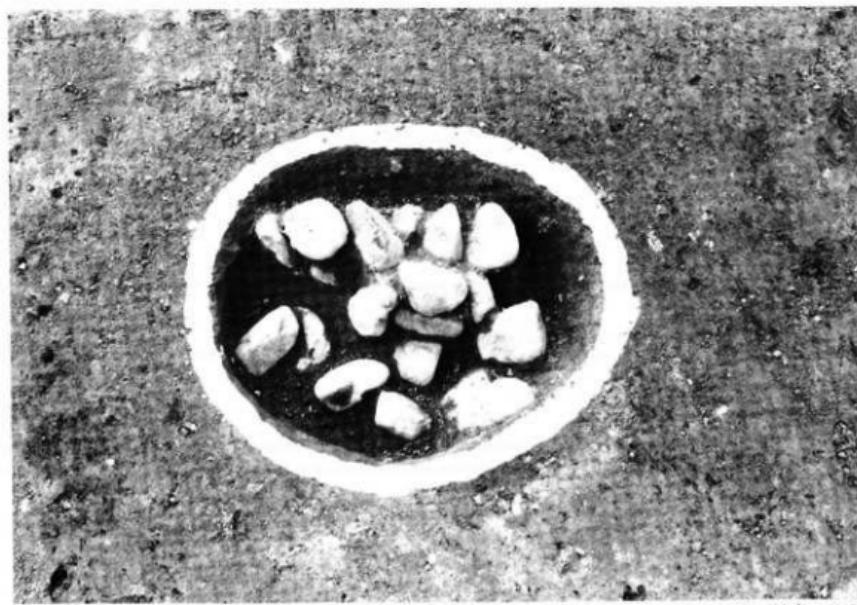
第2地点 溝一1



第2地点 捏立柱建物



第2地点 溝—1 東岸遺物出土状態



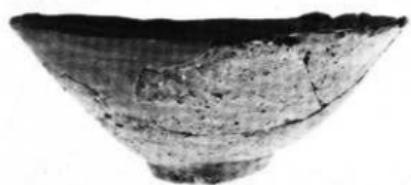
第2地点 P 7



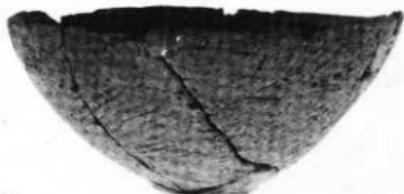
第2地点 溝一1土器出土状態



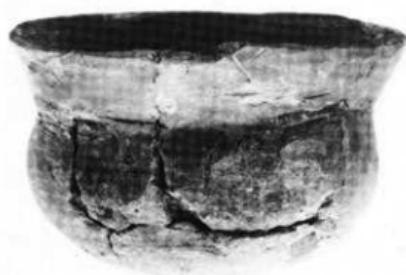
第2地点 溝一1土器出土状態



10



11



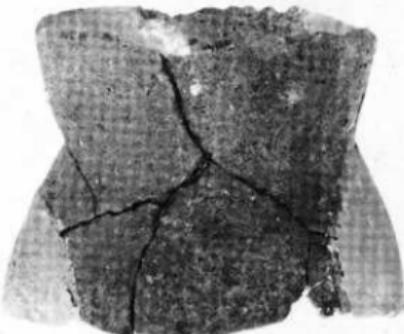
12



19



26



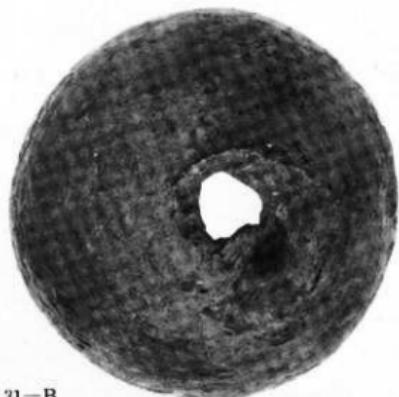
20



31-A



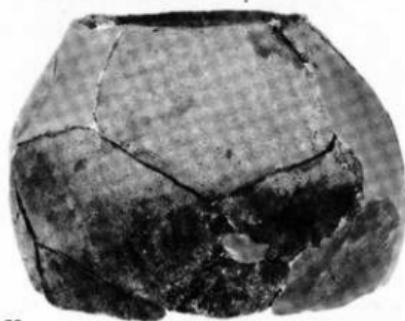
35



31-B



38



53

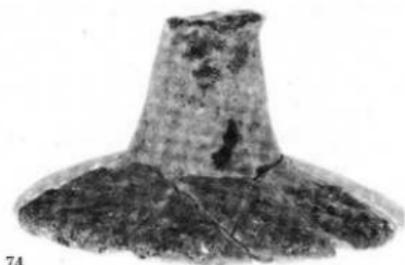
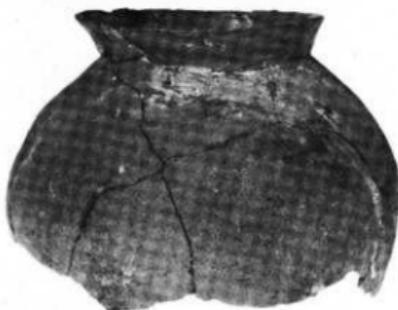


47



64

55



74

56



77



78

60



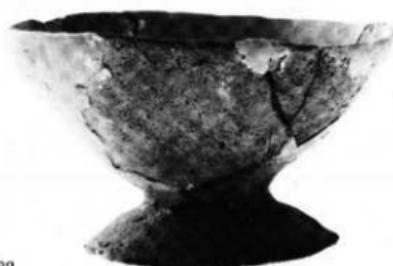
79



80



90



82



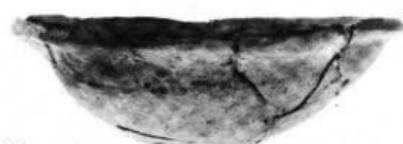
91



83



92



85



93



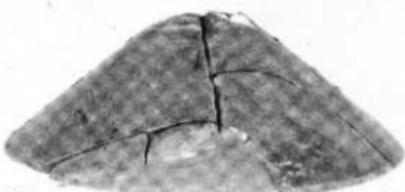
89



95



96



97



98



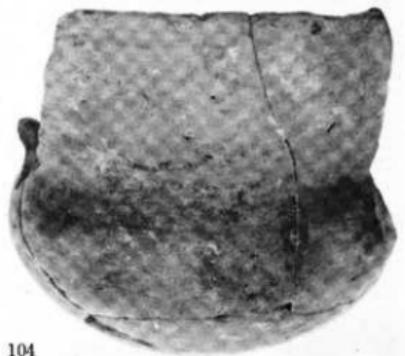
102



103



100



104



105



106



107



119

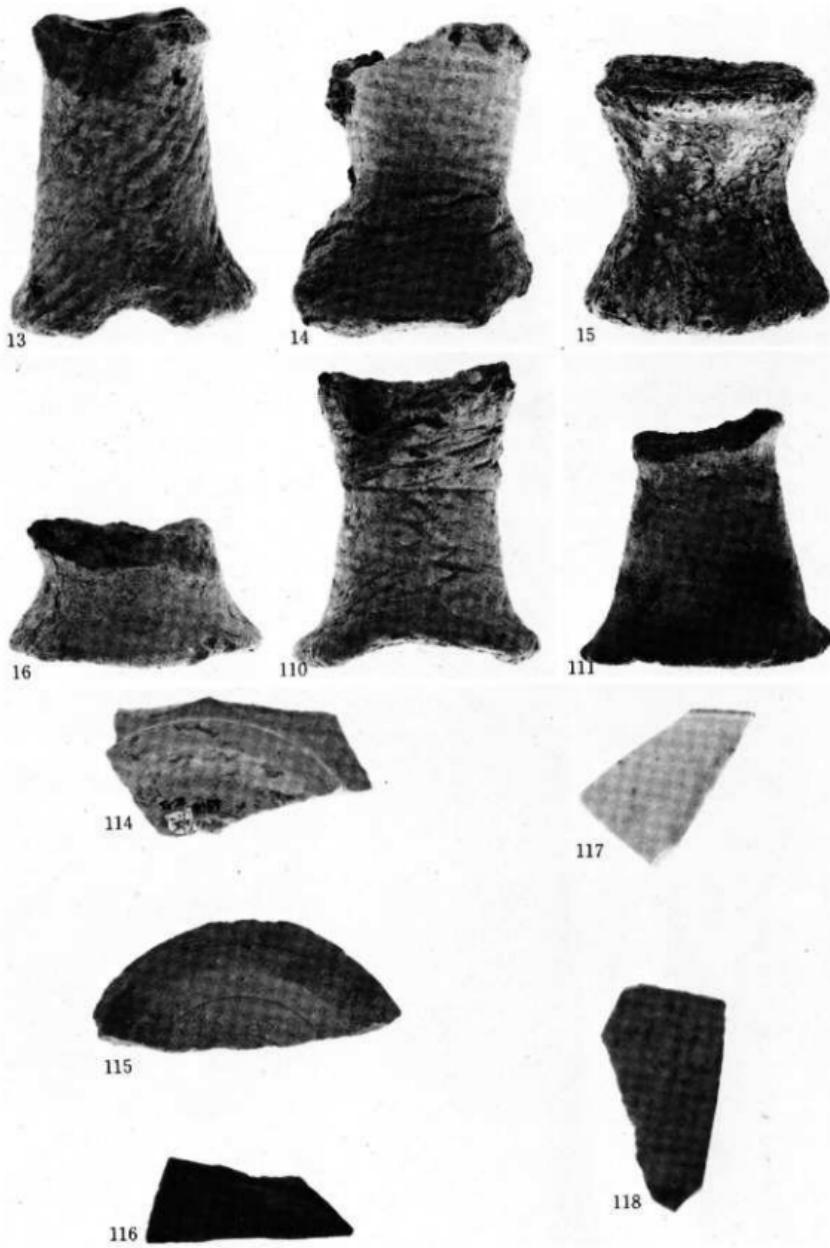


121



122

出土遺物



出土遺物

泉大津市文化財調査概要7
七ノ坪遺跡発掘調査概要II

1982年3月

発行 泉大津市教育委員会
編集 社会教育課
泉大津市東雲町9番12号
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

